

地方を盛あげ隊!

～文京区学生による盛岡アグリノベーション～

2024年3月



目次

刊行によせて 跡見学園女子大学地域交流センター 2

第1部 シンポジウム

「地方を盛あげ隊！ ～文京区学生による盛岡アグリイノベーション～」 講演録

開会あいさつ	小仲信孝	4
来賓あいさつ	成澤廣修	5
来賓あいさつ	谷藤裕明	6
文京区と盛岡市の関係紹介	堀越厚志	7
盛岡市の魅力紹介	福田 一	15
基調講演 大学と地域によるアグリイノベーション —協同探究から実践コミュニティをつくる—	早田 宰	21
アグリイノベーション事業を語る	熊谷俊彦	32
パネルディスカッション —文京区の学生は盛岡で何を学び感じたのか— 磯道 駿介、和田 乃英加、岡野 弥生、土屋 祐太、佐久間 優衣、早田 宰、熊谷 俊彦、川副 早央里		45
閉会あいさつ	土居洋平	63

第2部

シンポジウム関連資料

盛岡の魅力に触れ、交流を深める ～シンポジウム関連イベントの記録～	川副早央里	64
シンポジウム参加者へのアンケートの結果		72

刊行によせて

跡見学園女子大学地域交流センター

跡見学園女子大学地域交流センターでは、拓殖大学との共催により、2023年7月8日にシンポジウム「地方を盛りあげ隊！～文京区学生による盛岡アグリイノベーション～」を開催しました。

本書は、このシンポジウムの講演録と関連した催しの内容をまとめた開催記録をブックレットとして刊行したものです。

現在、少子高齢化や人口減少が進む日本社会において、関係人口や域学連携が注目され、大学が地方の課題や地域づくりに継続的に取り組み、地域活性化や人材育成に貢献することが求められてきております。跡見学園女子大学は、2022年3月に盛岡市と連携協力に関する包括協定を締結し、今年の3月で1年が経過しました。また、盛岡市と文京区の友好都市提携を締結して5周年となります。こうした連携の下で本学では、盛岡市玉山地域の農業発展を目指す、文京区学生と創るアグリイノベーション事業に取り組み、地方創生や教育学術研究の推進を目指してまいりました。

そこで今年度のシンポジウムでは、本事業に関わる文京区および盛岡市の担当者、事業に参加する文京区内の大学生（跡見学園女子大学、拓殖大学、東京大学）、専門家を交え、大学の地方（地域社会）でのフィールド活動やフィールドワーク教育が持つ意義と課題を検討しました。堀越厚志氏（文京区アカデミー推進部観光都市交流担当課長）からは、文京区と盛岡市の交流として提携の経緯についてお話いただきました。福田一氏（盛岡市玉山総合事務所産業振興課長）からは、盛岡市の魅力についてご紹介いただきました。早田宰氏（早稲田大学社会科学学術院教授）による基調講演ではソーシャルイノベーションのポイントが提示されました。熊谷俊彦氏（盛岡市政策統括特別参与）には、「文京区学生と創る盛岡アグリイノベーション事業」の概要と狙い、その進捗についてのご説明をいただきました。

後半のパネルディスカッションでは、各大学で行っている事業や活動の内容を参加学生たちに報告していただいた後、学生たちがこの事業を通して得た経験、学び、生活や進路への影響について議論し、今年度3年目となる事業の到達点と今後の展望を共有することができました。

また、シンポジウム関連企画として、登壇者以外の学生も交えた学生交流会、大学および各自治体の事業関係者の交流会、各大学の活動紹介を行うパネル展、学食での盛岡特別メニューの提供、盛岡さんさ踊りの披露なども行いました。このシンポジウムを機に、文京区・盛岡市・区内大学の学生など関係者との関係をさらに深め、活動を活性化させるきっかけをつくることができました。

最後に、この場をお借りして、当日ご来場くださったみなさま、本企画にご協力くださったみなさまに感謝申し上げます。



少子高齢化や人口減少が進む日本社会において、「産地人口」や「域学連携」が注目されています。都心の大学は地方社会の課題解決にいかに関与できるのか。今回は盛岡市の農業発展を目指す活動を事例に、学生と盛岡市および文京区の担い手を交え、大学の地方（地域社会）での活動や、教育の魅力を伝えるための、盛岡市の紹介講演のほか、さんさ踊りの披露や盛岡特別メニューをご用意もあります！

シンポジウム

地方を盛あげ隊！

～文京区学生による盛岡アグリノベーション～

主催 跡見学園女子大学 地域交流センター
 共催 拓殖大学
 後援 盛岡市・文京区
 開催日 7月8日(土) 13:00～16:00 (開場・パネル展 12:10 昼食 11:00)
 会場 跡見学園女子大学 文京キャンパス2号館1階 フロリウムホール
 東京都文京区大塚1-5-2
 入場 無料 (事前申込制)
 定員 150名
 申込 下記専用フォームURLまたは二次元コードから
 申込締切 7月1日(土)
 申込URL: <https://forms.office.com/r/0LryBRdncx>
 アクセス 東京メトロ丸の内線「茗荷谷駅」(出口2)より徒歩約2分
 東京メトロ有楽町線「護国寺駅」(出口5)より徒歩約8分
 問合せ 跡見学園女子大学地域交流センター
 TEL: 05-3941-7420 Mail: d-chiiki@atomi.ac.jp

2023年
7月8日(土)
13:00～16:00
オンライン同時配信



※お申し込みQR※




「地方を盛あげ隊！～文京区学生による盛岡アグリノベーション事業～」

*** スロプログラム *** 学生の活動を軸に、都心の大学等は地域社会の課題解決にいかに関与できるのかを考えます。盛岡の魅力に触れるイベントもありますので、ぜひご参加ください。

■前半の部 ■ 13:00～

- ・開会あいさつ (小中佑孝・跡見学園女子大学学長)
- ・来賓あいさつ (成澤廣修・文京区長)
- ・来賓あいさつ (谷藤裕明・盛岡市長)
- ・文京区と盛岡市の関係紹介 (飯)
- (稲越野志・文京区アカデミー推進部長・都市交流担当課長)
- ・盛岡市の魅力紹介 (飯) (堀田一・盛岡市玉山総合事務所産業振興課長)
- ・基調講演 (早田幸・早稲田大学社会科学部総合学術院教授)
- ・ゲスト講演「アグリノベーション事業を語る (飯)」
- (熊谷徳彦・盛岡市政策統括特別参事)

■ 休 憩 ■ 14:20～

- ・さんさ踊り披露 (大江戸さんさ)
- ・パネル展



■後半の部 ■ 14:40～

- ・パネルディスカッション「文京区の学生は盛岡で何を学び感じたのか」
- * 磯沼健介 (東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻 修士課程)
- * 新井大志 (早稲田大学工学部山手山研究室、工学部在学木研究室)
- * 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科履修ゼミ
- * 早田幸 (早稲田大学社会科学部総合学術院教授)
- * 熊谷徳彦 (盛岡市政策統括特別参事)
- * 川崎早央里 (跡見学園女子大学観光コミュニティ学部観光デザイン学科助教)
- ・開会あいさつ (土屋洋平・跡見学園女子大学地域交流センター長)

盛岡さんさ踊りを披露

■上演時間 14:20～14:30 (予定)

■会 場 スロリウムホール

若手県三ツ石伝説に由来する伝統文化である「さんさ踊り」を在京団体の、「大江戸さんさ」の皆様が披露していただきます。




学食にて 盛岡特別メニューをご用意

■営業時間 11:00～15:00 (ラストオーダー14:30)

■食 堂 文京キャンパス1号館1階

本学文京キャンパスの学食で盛岡にちなんだメニューをご用意します。

ぜひ本場の味を楽しんでください！！

■メニュー (予定)

盛岡冷麺 ・ ジャぱん ・ スイーツ

※特別メニューは要予約の可能性があります
 ※食べ飲み放題ではありません
 ※講演会場のフロアホールでの飲食は禁止です



シンポジウムのチラシ



会場の様子

開会あいさつ

跡見学園女子大学 学長
小仲 信孝

皆様、こんにちは。跡見学園女子大学の小仲でございます。本日は、このシンポジウム『地方を盛あげ隊』にご参加いただきましてありがとうございます。開催に先立ちまして私から、今日このシンポジウムを開催するに至りました経緯について、少しご案内をしたいと思います。

2019年2月、岩手県盛岡市と文京区の間で友好都市提携が締結されました。これを機縁にして、2021年に「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」が始まりました。この事業は、盛岡市玉山地域で抱える農業課題を解決し、農畜産物の高付加価値化および持続可能な農業生産の維持を目指すために、文京区内の大学と連携し、諸課題に取り組んでいくという産学官連携事業です。この事業が今年3年目を迎えるに当たり、これまでどのような活動が行われ、そしてどのような成果を挙げてきたのか、その具体的な事例を紹介しながら、都会の若者が地方創生に関わることの意義、産学官連携事業を継続、発展させていくための課題などについて、意見交換の場を設けたいという趣旨で、本日のシンポジウムを企画いたしました。

跡見学園女子大学では、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科の学生たちが、この事業に参加させていただいており、教室で学んだ知識や経験がどのように役立つのか、玉山地域でのフィールドワークを通じて、実践的に検証する機会をいただいております。本学の学生に限らず、この事業に参加している学生さんたちにとって現地、現場での実践的な体験は、他では得がたい貴重な学びの体験になっているにちがいません。

本日はご多忙の中、盛岡市副市長、文京区長にご来賓としておいでいただいておりますが、盛岡市、文京区、そして文京区内大学で学ぶ若者たちとの結び付きが、今後ともさらに深まり発展していくことを祈念いたしまして、私のご挨拶といたします。



開会あいさつの様子

来賓あいさつ

文京区長
成澤廣修

皆さん、こんにちは。文京区長の成澤です。本日は、跡見学園女子大学による『地方を盛あげ隊』のシンポジウムの開催、ありがとうございます。

先ほど、小仲学長から紹介がありましたように石川啄木生誕の地・盛岡市、そして終焉の地・文京区、この二つの自治体は、啄木を縁として友好都市になって今年度で5周年を迎えます。この5周年の1年間で、さまざまなイベントを開催していきます。

区内の大学、跡見学園女子大学、拓殖大学、そして東京大学、今日は三つの大学の皆さんたちによる発表をさせていただきます。東京と地方は対立の関係で語られることが非常に多いです。しかし、盛岡市と文京区のように歴史や文化を縁として、様々な連携事業を進めていくことで、相互連携そして交流人口を増やし、共にウィンウィンの関係をつくることができると、私は信じています。区内大学の皆さんたちに協力いただくことはもちろんですが、区も、盛岡市で作られた農産品等を、文京区の子どもたちの学校給食に生かしたり、11月には、跡見学園女子大学のご協力をいただいて、文の京ゆかりの文化人顕彰事業『朗読コンテスト』を、盛岡市ゆかりの文人である宮沢賢治の作品で行ったりするなど、様々な協力関係をこれからも進めていきたいと思っております。

今日のシンポジウムを一つのきっかけにして、これからも友好都市、盛岡市に関心を深めていただいて、例えば、今日は学生食堂では冷麺、じゃじゃ麺が販売をされているようですが、何かお買い物をするとき等でも、盛岡市のものを食べてみようという気持ちを持っていただけるような交流の関係を、これからも深めてまいりたいと思っております。学生の皆さんたちの気付きをこれからも大切にしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。心より感謝を申し上げます。ありがとうございます。



来賓あいさつの様子

来賓あいさつ

盛岡市長
谷藤 裕明

盛岡市副市長
代読 藤澤 和義

皆さま、こんにちは。盛岡市の副市長の藤澤です。本来であれば、市長が来てあいさつするところですが、代わりに私があいさつをさせていただきます。

まず、このようなシンポジウムを開いていただいたこと、本当に心から感謝を申し上げます。跡見学園女子大学様、そして文京区の皆さまにおかれましては、包括連携協定や友好都市盟約の締結を契機として、本市の地方創生および農業振興に、ご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

本日のテーマであります「文京区学生と創るアグリイノベーション事業」ではありますが、盛岡市北部に位置し、石川啄木生誕の地である玉山地域を舞台として、跡見学園女子大学様、拓殖大学様、東京大学様および東洋大学様と本市がフィールドワークなどの研究調査活動を通じて、地域の農業資源の掘り起こしや農業の発展を目的として行っているものです。

この事業は令和3年度からスタートしており、跡見学園女子大学様には、地域コミュニティデザインの視点から見た、もりおか短角牛の現状と振興策の検討について取り組んでいただいております。当初はコロナ禍の影響により、思うようにフィールドワークを行うことができませんでしたが、昨年度から地元の短角牛の繁殖農家や精肉業者などを訪問できるようになり、もりおか短角牛の周知を目的としたモニターツアーや、銀座にあります岩手県のアンテナショップ「いわて銀河プラザ」での短角牛の販売促進イベントに取り組んでいただいたところです。短角牛はおいしいお肉ですので、どんどん広げていってもらえればと思っております。このような跡見学園女子大学様の熱心な取り組みにこの場をお借りして厚く御礼申し上げますとともに、今後も文京区内の大学と広く連携し、市の農業振興への取組を通じて文京区との絆をさらに強固なものにしていきたいと思います。

また、本市は今年1月に、ニューヨーク・タイムズ紙で2023年に行くべき52カ所のうちロンドンに次ぐ2番目の場所に選定されました。そのことによって、国内外から多く注目を集めており、インバウンドもどんどん進んでおります。会場の皆さまにおかれましては、学内での盛岡特別メニューの販売、盛岡さんさ踊りの披露などにより、盛岡の魅力に触れていただいて、ぜひ盛岡市に足を運んでいただきたいと思っております。

結びに、本市の農業をはじめとする地方創生にご尽力いただいている方々、文京区と本市との間で、さまざまな交流が行われていることに感謝申し上げますとともに、本日のシンポジウムが有意義なものになりますことを祈念いたしまして、あいさついたします。どうぞよろしくお願いいたします。



来賓あいさつの様子（藤澤和義副市長）

文京区と盛岡市の関係紹介

文京区アカデミー推進部観光・都市交流担当課長
堀越厚志

はじめに

文京区アカデミー推進部、観光都市交流担当課長の堀越と申します。本日、私より盛岡市と文京区の関係、あるいは交流事業の紹介等をさせていただきます。

1. 文京区アカデミー推進部について

その前に、まず私どもが所属しますアカデミー推進部について、簡単にご説明させていただければと思っています（図1）。まず、このアカデミー推進部という部署ですが、全国的にも恐らく文京区のみにある部署かなと思っています。部署名の経緯ですが、平成17年に本区で策定しました「文京アカデミー構想」にて、生涯学習にとどまらずスポーツや文化振興、さらには観光や都市交流の分野等の連携も視野に入れ「区内丸ごとキャンパス」化を目指すこととしました。施策を総合的に展開することを主眼に、生涯学習・スポーツ・文化芸術を教育委員会から区長部局のほうに移管しまして、その後、観光・国際交流も加えられた5分野の施策を管轄する部署として、アカデミー推進部が組織されました。

現在は、令和4年度から8年度を計画期間として、文京区アカデミー推進計画に沿った施策事業を展開しています。先ほど申し上げました「区内丸ごとキャンパスに」を基本理念として、5分野において「基本方針」を定めています（図2）。国内、国際交流分野の基本方針の一つに、「国内交流自治体との交流促進と相互発展」を定め、各自治体と協働し事業を展開しているものとなっています。国内外の自治体との交流を担うこの都市交流担当では、現在海外は3都市、国内13自治体を中心とし交流を育み、お互いの魅力発信ですとか関係人口、交流人口の創出、また防災面等の多岐にわたる協力関係を構築しているところです（図3）。



写真1 講演の様子



写真2 講演の様子

文京区アカデミー推進部

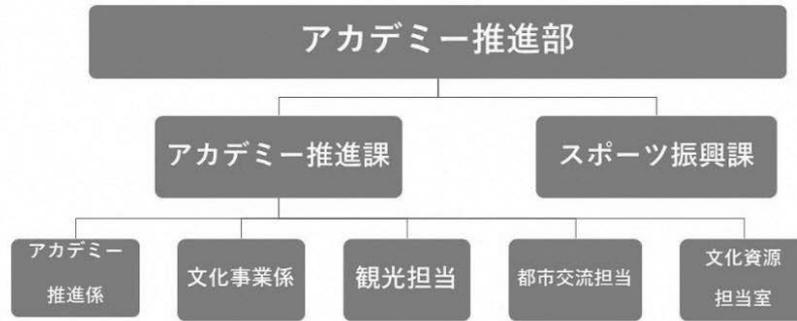


図1

文京区アカデミー推進計画(令和4~8年度)

基本理念：区内まるごとキャンパスに

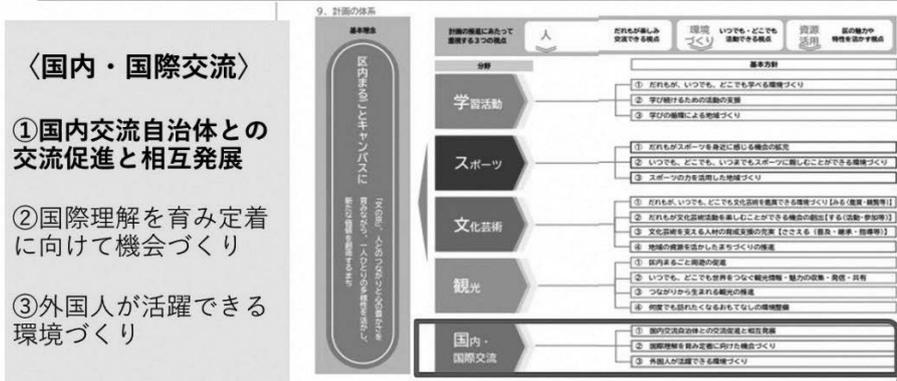


図2

文京区と協定を締結している自治体

- 岩手県盛岡市
- 新潟県魚沼市
- 茨城県石岡市
- 新宿区
- 石川県金沢市
- 山梨県甲州市
- 広島県福山市
- 島根県津和野町
- 福岡県北九州市
- 熊本県
- 熊本県熊本市
- 熊本県玉名市
- 熊本県上天草市

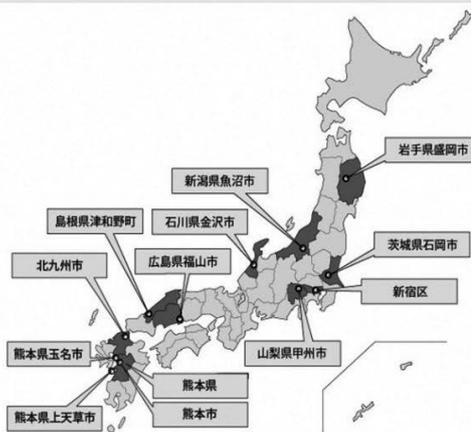


図3

2. 文京区と盛岡市の関係

続きまして、本題の盛岡市と文京区の関係についてご紹介します。『呼吸すれば、胸の中にて鳴る音あり。凧よりもさびしきその音』、『眼閉づれど、心にうかぶ何もなし。さびしくもまた、眼をあけるかな』。これは文京区小石川5丁目にあります、石川啄木終焉の地、石川啄木顕彰室にある歌碑に刻まれた、第2歌集『悲しき玩具』の2首です（図4、5）。詩人、歌人、評論家として有名な石川啄木ですが、文京区ゆかりの文人の一人です。

現在の石川県、盛岡市玉山区日戸、旧南岩手郡日戸村で生を受けた石川啄木は、文京区と大変ゆかりが深く、明治35年に文学をもって身を立てるために上京すると、現在の文京区の音羽（当時の小石川区小日向町）に下宿をし、26歳の若さで亡くなるまで区内計6カ所で居を構え、その間、後の世に残る多くの作品を生み出しました。盛岡市と文京区は、平成19年より石川啄木を検証する啄木学級、文の京講座の開催を交流のきっかけとして、平成23年に災害時における相互応援に関する協定、翌平成24年に「地域文化交流に関する協定」を締結しました（図6）。また、平成27年3月には盛岡市の協力を得て、第一号歌碑と同じ姫



図4

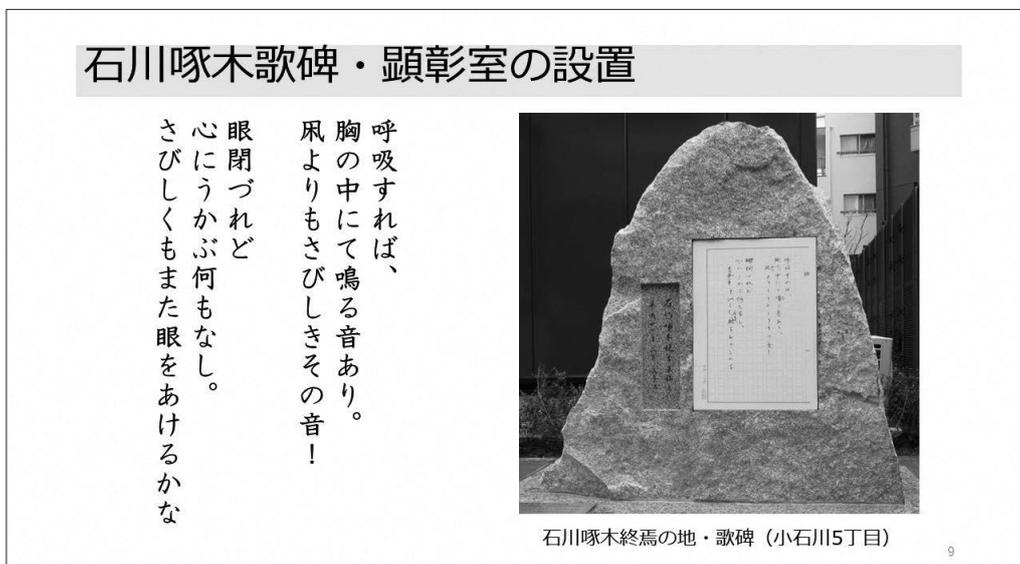


図5

文京区・盛岡市の交流のきっかけ

石川啄木をきっかけに交流開始

「啄木学級 文の京講座」の実施
(平成19年～)

盛岡市との協定

「石川啄木ゆかりの地」
災害時における相互応援に関する協定
(平成23年11月10日)

「石川啄木ゆかりの地」
地域文化交流に関する協定
(平成24年7月5日)



11

図6

神小桜石を使用した、歌碑および石川啄木顕彰室を文京区小石川に設置しました。

盛岡市と文京区にゆかりのある文人等は他にもおります(図7)。盛岡中学校、盛岡高等農林学校で勉学に勤しみ、その後、区内本郷菊坂で暮らした宮沢賢治。現在の盛岡市で南部藩士の子として生まれ、東京帝国大学に学びアメリカ、ドイツに留学。帰国後、自由主義的人格主義の教育者としても多大な影響を与え、農政学者、教育者として活躍し、国際連盟事務局次長として「太平洋の架け橋」となり、明治37年から亡くなるまで、区内の小日向に住んだ新渡戸稲造。また明治37年、現在の盛岡市で生誕、後に区内本郷に移り、大正11年まで本郷内の7カ所に移り住み、アイヌ語の研究とユーカラの筆録をし、その学問的研究を進めた金田一京助。一方、盛岡市には石川啄木記念館をはじめ、盛岡市先人記念館、もりおか啄木・賢治青春記念館など、文京区ゆかりの文人にまつわる施設も多数ございます。東京から盛岡までは、新幹線はやぶさで片道、約2時間10分です(図8)。区民の皆さまも、これを機にぜひ、盛岡市のほうに足を運んでいただければと思っています。

盛岡市と文京区はその後も、石川啄木をきっかけとして、文化面での交流に加え、区で行っている「文

文京区と盛岡市のゆかり

氏名	カテゴリー	代表作等
宮沢 賢治	文人	・注文の多い料理店 ・銀河鉄道の夜
新渡戸 稲造	文人	・武士道
金田一 京助	言語学者	・アイヌ語学、アイヌ文学研究創始者
石川 啄木	文人	・一握の砂

12

図7

文京区・盛岡市の基礎データ		
令和5年6月1日現在		
	文京区	盛岡市
人口（人）	230,969	283,956
面積（km ² ）	11.29	886.47
木・花	いちよう・つつじ	カツラ・カキツバタ
観光	花の五大まつり	盛岡さんさ踊り
海外交流	ドイツ・カイザースラウテルン市 トルコ・イスタンブール市ベイオウル区 中国・北京市通州区	カナダ・ビクトリア市
アクセス	東京～盛岡 2時間10分（はやぶさ）、2時間31分（はやて） 3時間04分（やまびこ）	

13

図8

京博覧会」の出展、「盛岡さんさ踊り文京区民ツアー」の開催など、両都市が互いの特長を活かして交流を進めてまいりました。こうした歴史的・文化的つながりを契機とし、住民間の交流が図られる中、両都市の友好親善をさらに深め、都市交流の促進、ひいてはさらなる発展させるため、また多方面における協力関係を構築し、さまざまな場面での連携・協力を円滑に展開するため、平成31年、石川啄木の生誕の日と同じ2月20日に、「盛岡市・文京区友好都市提携」をしました（図9）。3月には、区内小石川の播磨坂で開催しました文京さくらまつりにて、ミスさんさをはじめとした盛岡さんさ踊りパレードも、満開の桜の下でご披露いただくなど、友好として広く区民にも周知できました。同年8月4日には、「盛岡市・文京区友好都市提携記念実行委員会」主催により、啄木生誕の地である盛岡市玉山地域の洪民公園において、記念植樹を実施し、両都市の友好をさらに強固にしました（図10）。

さらには友好都市提携1周年を記念して、盛岡市産のアカマツを使用したベンチを寄贈していただきました（図11）。側面板には啄木の短歌が刻まれています。現在は、文京シビックセンター1階に設置してございますので、シビックセンターにお立ち寄りの際にはぜひ、ご覧ください。また、昨日7月7日には、藤



14

図9

文京区・盛岡市友好都市提携記念植樹

令和元年8月4日「盛岡市・文京区友好都市提携記念実行委員会」主催により、
玉山地域の渋民公園において、記念植樹を実施



写真提供:盛岡市

15

図10

友好都市提携1周年 盛岡市産材ベンチの寄贈

令和2年2月19日 友好都市提携1周年記念に寄贈



盛岡市の森林公園
「都南つどいの森」
シンボルキャラクター
「つどりん」

現在は、シビックセンター
1階エスカレーター横に設
置しています。

16

図11

澤副市長様、村上副議長様をはじめとしました盛岡市の訪問団の皆さまが文京区役所を訪問いただきました。来年2月に迎える友好都市提携5周年を機に、さらなる両都市の相互発展・相互協力を確認し合いました。

3. 文京区と盛岡市の交流事業

最後に、これまでの文京区と盛岡市の交流事業をご紹介します。文京区との交流のきっかけとなりました「啄木学級 文の京講座」は、両都市および広域財団法人盛岡コンベンション協会の共催により、平成19年から開催しています（図12）。今年度は、昨日7月7日に文京シビック小ホールでロバート キャンベル氏を講師にお招きし、約300名と多くの方々にご参加をいただき盛況の中で行われました。平成30年度、令和4年度には、東京都内で活動する盛岡さんさ踊り普及団体にご協力いただき、区民向けさんさ踊りワークショップを実施しました（図13）。盛岡さんさ踊りは、「世界一の太鼓大パレード」と称され、毎年8月上旬に盛岡市内でも一大イベントとして披露されています。本日もこの後、14時20分頃から大江戸さんさの

交流事業① 啄木学級 文の京講座

平成19年度～
文京区・盛岡市・盛岡観
光コンベンション協会の
共催



18

図12

交流事業② さんさ踊りワークショップの実施

平成30年度、令和4年度
に実施



19

図13

交流事業③ 区事業への物産展の出店

盛岡市の特産品を文京区へのイベントで販売

- ・南部せんべい
 - ・盛岡冷麺
 - ・盛岡じゃじゃ麺
 - ・いちご煮
 - ・ほろほろ漬け
- など

今年もたくさん
出店していただ
く予定です！



第16回 文京区
国際交流フェスタ
with 国内交流
International Exchange Festival in Bunkyo City



20

図14

令和6年2月20日に友好都市締結5周年を 迎えます!

令和5年度実施予定の交流事業

- 盛岡文士劇を大ホールで公演(5月20日実施済)
- 「時代まつりin文京」に物産展の出店・ミスさんさ踊りの出演
(11月3日実施予定)
- 真砂中央図書館等で盛岡市特集企画の実施(時期未定)
- 盛岡市産の食材を使った学校給食(令和6年2月20日予定)

など

21

図15

皆さんによる、さんさ踊りの披露があると伺っていますので、私も大変、楽しみにしています。区が実施をしています国際交流フェスタ等におきましても、物産店等にご出店をいただいています(図14)。今年度につきましても、3月の中旬にご出店をいただく予定となっています。

そして来年2月、盛岡市と文京区の友好都市提携5周年を迎えます(図15)。ここ数年、コロナ影響で人的交流も中止が相次いでおりましたが、今年5月、文京シビックホールで開催し、多くの区民が盛岡の文化に触れた「盛岡文士劇東京公演」、また区民が歴史に触れる機会を創出し、今年区内で開催する全国藩校サミット文京大会の機運醸成を図ることを目的に11月3日区内で開催します「時代まつりin文京」。区内在住の子どもたちが文京区ゆかりの人物になりきり、傳通院から礪川公園まで練り歩く行列に、盛岡さんさ踊りもご参加いただき、友好都市提携5周年に花を添えていただくこととなっています。

これら交流都市提携5周年事業を通じ、両都市の結び付きを一層深め、さらなる発展と住民間の交流につなげて、未来永劫の友好関係構築に向け、引き続き連携を図っていきます。以上、盛岡市と文京区の関係についてのご説明となります。ご清聴ありがとうございました。

盛岡市の魅力紹介

盛岡市玉山総合事務所産業振興課長
福田 一

はじめに

盛岡市産業振興課の福田と申します。盛岡市の魅力を紹介させていただきます。どうぞよろしくお願ひします。ちなみに、盛岡市に来たことがある方はいらっしゃるでしょうか。ほとんどの方は来ていらっしゃるということですか、ありがとうございます。それでは、魅力を紹介させていただきたいと存じます。

1. 盛岡市の概要

まずは、盛岡市の概要について説明をいたします(図1)。盛岡市は岩手県の県庁所在地で県の中部に位置しています。人口は28万人、面積は886平方キロメートルです。面積の73パーセントは森林になってございます。人口密度は1平方キロメートル当たり約318人。文京区さんと比較しますと人口は1.2倍、面積は78倍、人口密度は文京区の1.5パーセントにすぎません。文京区から直線で約460キロメートル離れていますが、新幹線では東京から盛岡まで、最短で2時間10分でございます。また東北自動車道が通っており、北東北と首都圏や仙台市をつなぐ結節点となっています。

2. 盛岡市の歴史・著名人

盛岡市の歴史は16世紀後半から始まります(図2)。豊臣秀吉が小田原で北条氏を討伐したときに、南部藩の功績を認めて今の盛岡の場所に本領安堵しました。南部藩は秀吉の了承を得て、盛岡城を建てたということになっております。明治維新によって盛岡城は廃城となり、建物のほとんどは取り壊されましたが、現在は城跡の石垣を活かした公園整備が行われ、「盛岡城跡公園」として市民や観光客に親しまれております。

明治22年には、全国39都市の一つとして盛岡市が市制施行されました。盛岡市は、県都として明治、大正期に駅舎、官公庁、銀行、電気会社といった建築物が次々と建てられ、現在もそれらの一部が当時



写真1 講演の様子



写真2 講演の様子

1 盛岡市の概要

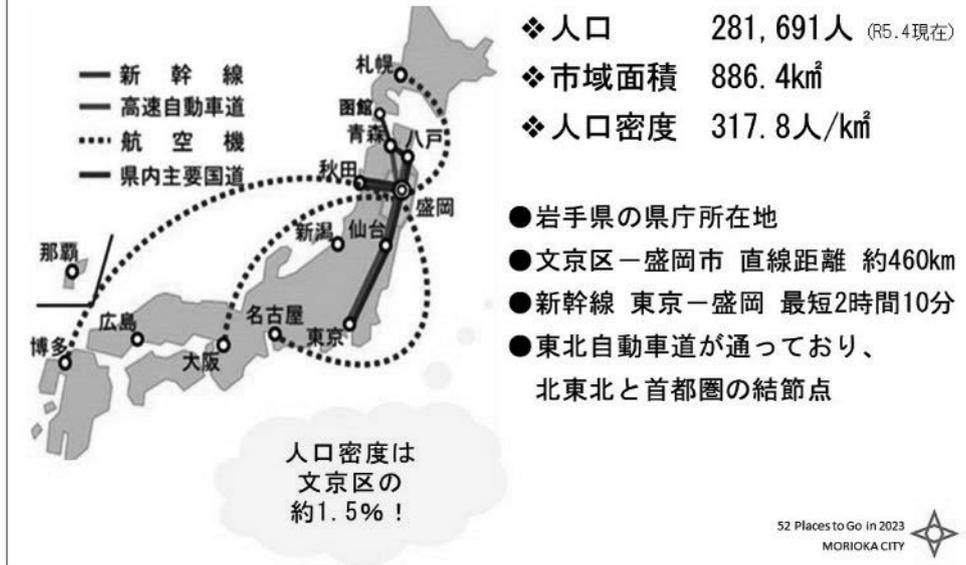


図1

2 盛岡市の歴史・著名人

❖歴史

- 豊臣秀吉から現在の盛岡の場所に本領安堵され、盛岡藩が誕生。

盛岡城が建てられる。

- ▶ 現在 盛岡城跡公園

- 明治22年 市制施行 県都として都市機能を備える。

- ▶ 現在 銀行・官公庁等の洋風建築を保持

❖著名人



- 政治家…原敬、新渡戸稲造、米内光政…

- 文化人…石川啄木、金田一京助、宮沢賢治…

- 現在……大友啓史、菊池雄星…

盛岡城の石垣を活かした盛岡城跡公園 ▶



図2

の和洋折衷の建築様式を代表する建物として保存され、歴史を感じられる街並みを形成しております。また、盛岡市は過去、現在、問わず多くの著名人を輩出しております。政治部門では明治、大正期に活躍し日本で初めて本格的な政党内閣を組織した総理大臣、原敬。大正時代に国際連盟事務次長を務めた国際人、新渡戸稲造。戦時下に総理大臣や海軍大臣を務め、太平洋戦争の終結に尽力した米内光政などがおります。

文学部門では文京区との交流のきっかけとなった、望郷の歌人、石川啄木。アイヌ語研究者の金田一京助。盛岡で文学、仏教、農業等を学び、信仰や自然を題材とした童話を生み出した宮沢賢治などがおります。また、数々の歴史ドラマや、『るろうに剣心』、『影裏』等の映画を手掛けた映画監督、大友啓史や、トロント・ブルージェイズで活躍している菊池雄星など、数々の著名人を輩出しているところでございます。

3. 盛岡市の自然

続いて、盛岡市の自然について紹介します（図3）。盛岡市は、都府県庁所在地では最も寒いといわれております。8月の平均気温は23.5度ですが、2月の平均気温はマイナス0.9度です。冬場の最低気温は、マイナス10度からマイナス5度くらいになります。東京都の8月の平均気温が27度、2月の平均気温が6度、冬場の最低気温は3度でございますので、盛岡市はとても寒いと言えます。市街地では、駅や官公庁のすぐそばを北上川や中津川が流れ、昼休みに散歩を楽しむサラリーマンやピクニックを楽しむ家族が見受けられます。秋にはサケの遡上が見られ、冬には白鳥がやってきます。また、盛岡駅を出て繁華街に向かう際に通過する開運橋からは、岩手山と北上川、市民が植えた季節の花々が織り成す美しい風景を楽しむことができます。文京区学生と創るアグリイノベーション事業の舞台となる玉山地域は、盛岡市北部の中山間地域となっており、姫神山をはじめとした自然が豊かな地域です。玉山地域の藪川には岩洞湖という湖がありまして、冬場は氷上ワカサギ釣りを楽しむことができます。湖の氷の厚さが15センチになりますと釣りが解禁になります。



図3

4. 盛岡市の産業

続いて、盛岡市の産業について紹介します（図4）。盛岡市は、第3次産業に従事の方が就業人口の約8割を占めています。第1次産業に従事する方は約3パーセント、第2次産業に従事する方は約13パーセントです。第1次産業では生産地であり、かつ県内最大の消費地であるという地域特性を生かし、地産地消をベースとした付加価値の増大につながる農業に取り組んでいます。稲作、野菜、果樹、畜産等の組み合わせによる複合的な経営を中心とした、多種多様な農畜産物の生産が特徴です。もりおか短角牛、行者にんにく、お米の銀河のしずく、盛岡産リンゴ、アロニアといった様々な特産品があります。第2次産業では医療機器、健康器具等を取り扱うヘルステック分野、東北第2の集積を誇るIT産業、北東北の主要道路の結節点を活かした、物流拠点整備といった分野に力を入れています。第3次産業では、卸売業、小売業の他、医療、福祉関係、宿泊業、飲食サービス業に就いている方が多いです。

4 盛岡市の産業

❖ 産業3部門別人口 (単位:人 R2.10現在)

■ 第一次産業 ■ 第二次産業 ■ 第三次産業 ■ その他



A L O I I A



❖ 第一次産業 …稲作、野菜、和牛…複合的な経営・多様な農畜産物

❖ 第二次産業 …ヘルステック、IT産業、物流…

❖ 第三次産業 …卸売・小売業、医療・福祉、宿泊業・飲食サービス…

もりおか短角牛▽



行者にんにく▽



銀河のしずく(米)▽



盛岡りんご▽



52 Places to Go in 2023
MORIOKA CITY



図4

5. 盛岡市のまつり・イベント

続いて、盛岡市の祭り、イベントについて紹介します(図5)。盛岡市といえば、やはり盛岡さんさ踊りです。和太鼓の出演数で、ギネス世界記録になったことがあります。さんさ踊りは昔、人々を苦しめていた鬼が三ツ石の神様によって退治され、降参の印に誓約の手形を石に残して去ったとき、喜んだ人々がさんさ、さんさと踊りはやしたということに由来しております。さんさ踊りの他にも市内フルマラソン「いわて盛岡シティマラソン」、急流をこぎ分けるスリルや北上川から臨む豊かな自然や街並みを満喫できる「盛岡・北上川ゴムボート川下り大会」。山口青邨や石川啄木を輩出していることを契機に始まった、日本語と英語による俳句の大会「盛岡国際俳句大会」といった様々な催しものがあります。

5 盛岡市のまつり・イベント

❖ 盛岡さんさ踊り



❖ いわて盛岡シティマラソン



❖ 盛岡・北上川ゴムボート川下り大会



❖ 盛岡国際俳句大会



図5

6. 盛岡市がニューヨークタイムズに選ばれました！

先ほど、何回かごあいさつの中にも出ておりましたが、盛岡市は令和5年1月12日に、ニューヨーク・タイムズ紙の2023年に行くべき52カ所に、イギリスのロンドンに続く2番目として紹介されました(図6)。盛岡市を推薦した記者のクレイグ・モドさんは、盛岡市を「歩いて回れる宝石的なスポット」と呼び、大正時代に建てられた和洋折衷の建築物や、盛岡城跡公園、街に溶け込む喫茶店、飲食店、本屋等を紹介しました。喫茶店や飲食店は、若い人たちが切り盛りしているお店や、親子で経営しているお店が多く、お店の人たちが皆、親切なことも評価された要因の一つでした。さらにモドさんは、盛岡市を一度上京してもいつか戻ってきたくなるような街と捉えており、少子化が進む中で中規模都市が、これから目指すべき街の姿のロールモデルとも評してくださいました。このスライドにあるわんこそばの東家、本屋BOOKNERD、ジャズ喫茶開運橋ジョニーの他にも、歩いて回れる個性的なお店がたくさんあります。ぜひ皆さまもいらしてみてください。

6 盛岡市がニューヨークタイムズに選ばれました！

❖ 「2023年に行くべき52か所」の2番目に選出 (R5.1.12)



谷藤盛岡市長とNYT記者のクレイグ・モドさん

- 歩いて回れる宝石的なスポット
- 歴史が息づく街並みの他、街に活気が溢れ、若い人たちが主体的であることも評価された。

わんこそば「東家」▽



本屋「BOOKNERD」▽



ジャズ喫茶「開運橋ジョニー」▽



52 Places to Go in 2023
MORIOKA CITY

図6

7. 盛岡市の新注目スポット

最後に、盛岡市の新注目のスポットを紹介します(図7)。まずはリニューアルオープンした「盛岡バスセンター」です。旧盛岡バスセンターは昭和35年に開業し、長く市民に愛されてきましたが、老朽化により平成28年に一時閉鎖しました。令和4年10月にマルシェやスパ、サウナ、宿泊施設、子育て支援施設を併設してリニューアルしました。バス路線で地域をつないできた歴史を生かし、人々と地域をつなぐ拠点として市内外の人々に親しまれています。

次は令和5年4月にオープンした、「きたぎんボールパーク」です。収容人数2万人、プロ野球一軍公式戦を開催できる野球場が誕生しました。5月には楽天対ソフトバンク、6月にはジャイアンツ対スワローズの公式戦が開催され、市内のみならず県内外から多くの人々が訪れました。岩手県は大谷翔平、菊池雄星、佐々木朗希をはじめとした、メジャーリーガーやプロ野球選手を輩出しております。野球場のオープンにより、岩手の野球文化がますます盛り上がることを期待しています。

7 盛岡市の新注目スポット

❖ 盛岡バスセンター



❖ きたぎんボールパーク



❖ 盛岡市動物公園ZOOMO



52 Places to Go in 2023
MORIOKA CITY

図7

続いて、同じく4月にリニューアルオープンした「盛岡市動物公園ZOOMO」です。老朽化への対応及び魅力向上に向けた整備のため、1年半にわたる休園を経て再開しました。65種、300頭羽の動物たちの飼育展示となっており、できるだけ自然環境に近い動物たちの生態を見ることができる、子どもも大人も楽しめる施設となっております。

紹介は以上となります。皆さまに少しでも興味を持っていただき、そして実際に盛岡に足を運んでいただけたら、とてもうれしいです。また、盛岡市でもふるさと納税を行っております。盛岡三大麺、盛岡冷麺、じゃじゃ麺、わんこそばや地ビールなどの返礼品を楽しみながら、盛岡市を応援していただければと存じます。ご清聴いただきありがとうございます。ありがとうございました。

基調講演

大学と地域によるアグリイノベーション —協同探究から実践コミュニティをつくる—

早稲田大学社会科学学術院教授
早田 宰

はじめに

早稲田大学の早田と申します。どうぞよろしくお願いたします。お手元の資料の中に資料を適宜、見ていただきながら聞いていただければと思います。

まずは、このような文京区と盛岡市と連携大学による交流という素晴らしい会に参加する機会をいただき大変ありがとうございます。早稲田大学は文京区の隣、新宿区にございます。先ほど文京区の堀越課長から文京区には文の都としてアカデミー推進部が設置されているとうかがい、たいへん素晴らしいと感じておりました。このような私たちの交流プラットフォームは日本ではまだまだ多くないと思います。ぜひ文京区民の皆さん、盛岡市の皆さんで育てていただきたい、学生さんにとってはまたとない学ぶ機会だと思います。

私の専門はコミュニティ開発、ソーシャイノベーション、協働などを研究分野にしています。今回のテーマである農を活かしたソーシャイノベーションについても関心があり私なりに地域と大学の連携をさまざまなエリアで取り組んできました。盛岡市には震災以来、毎年数回行く機会があります。私のフィールドは三陸の沿岸部ですが、盛岡に列車で着きますと、空気が清浄で背筋が伸びると石川啄木も云っておりますけれども、そういう地域ごとの個性・風土・文化等のちがいを感じています。きょうのテーマに、「協同探求から実践コミュニティをつくる」と書きました。「一緒に考え、そして、よし、やってみよう」となるということをお話できればと思っています。



写真1 講演の様子



写真2 講演の様子

1. 社会課題の解決に「新技術」と「学生」を加えてみよう

まずは、世界では様々な新しい地域課題が現れています。その構造はグローバル化により複雑化してお

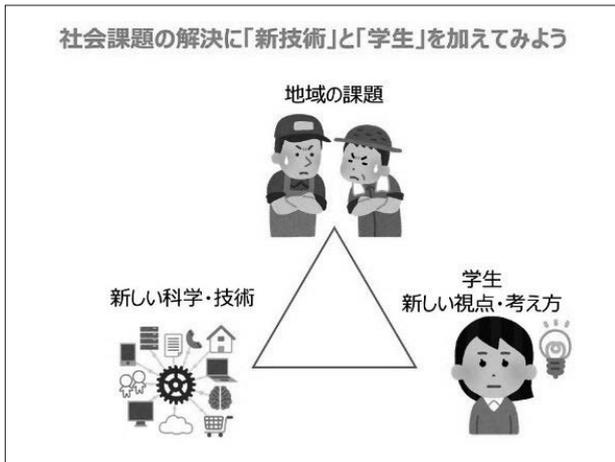


図1

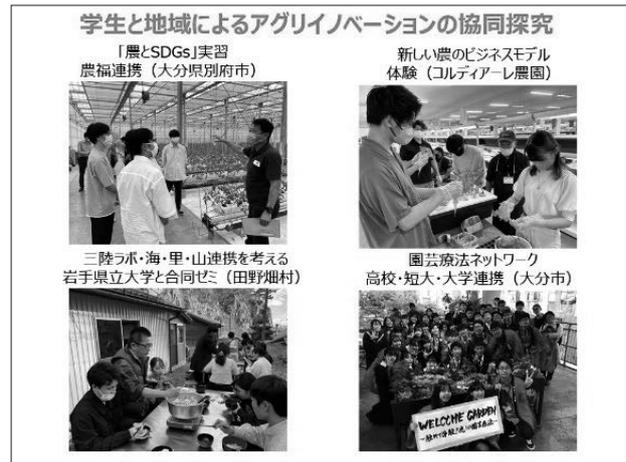


図2

りなかなか簡単に解けないことがたくさん増えてきました。そのため、以下の二つの視点が重要になると申し上げたいと思います。一つはテクノロジーのイノベーションです。新しい技術を活用してみる。もう一つが社会のイノベーションです。新しい社会のしくみを育てる。さまざまな担い手を増やしていく。特に若い視点、学生さんを地域づくりのチームのメンバーに入れたらどうかと。若い学生さんがまちづくりに入ると新しい感性、新しい発想、新しい知識、先端的な研究、新技術などが地域に入ってきます(図1)。地域の問題解決にテクノロジーと学生という二つの要素が加わることで、できなかったことができるようになります。そういう経験をたくさんしてきました。

私は各地で地域と学生と一緒に活動をしています。大学生、短大生、専門学校、地域の高校生、ときには中学生とも一緒にラボ活動とっていますが、創造的な探究、ワークショップ、意見交換などを行っています(図2)。そうすると地域の大人たちの思考や行動も変わってくる。ここまで若い皆さんが一生懸命やってくれたならば、私たちが何かしなきゃなど、そういうふうになってくれるというのを感じます。

2. 農からのソーシャイノベーションとは

さて今日は「アグリイノベーション」がキーワードです。ソーシャイノベーションの前提として、まず地域社会にはさまざまな課題があり、その解決は一筋縄ではいかないことが多いということです。現代社会の要因が複雑に絡んでいることが多く、それを解きほぐしながら突破していく必要があります。特に経済・社会・環境にまたがる問題が多くなっているわけです(図3)。そういった中でチャレンジをするというのはどういうことか。

イメージとして、ラグビーのイラストをつけました(図4)。私たちが突破すべき壁として、技術、知識、制度、インフラや文化の習慣等があります。これらのニッチ(すき間)を戦略的に広げながら機会をつくってゆく、突破していく、そういうノウハウが必要になります。

それからもう一つ、突破のためになんとかしたい要因があります。それは一番下に描いてある無関心層です。イノベーションというのは、ともすると単純に新しいアイデアやテクノロジーを導入すればいいと誤解されがちですが、経営学のドラッカーがこのようにいっています。「イノベーションとはビジネスモデルを導入しただけではまだ半分である、残りの半分は、顧客の創造である」と。つまりユーザーを育てることです。すなわち、あたらしい商品やサービスが生まれたとき、ぜひ使ってみようという人が現れなかったらイノベーションは起きない、アイデアだけで終わってしまうのです。新しい顧客を育てるのは誰かということ、技術者にそれはできない、社会イノベーターが必要なわけです。「新しいアイデアや技術を使える社会状況を整えながら相乗効果を生み出して社会のアップグレードを進めていくのがソーシャイノベーションで

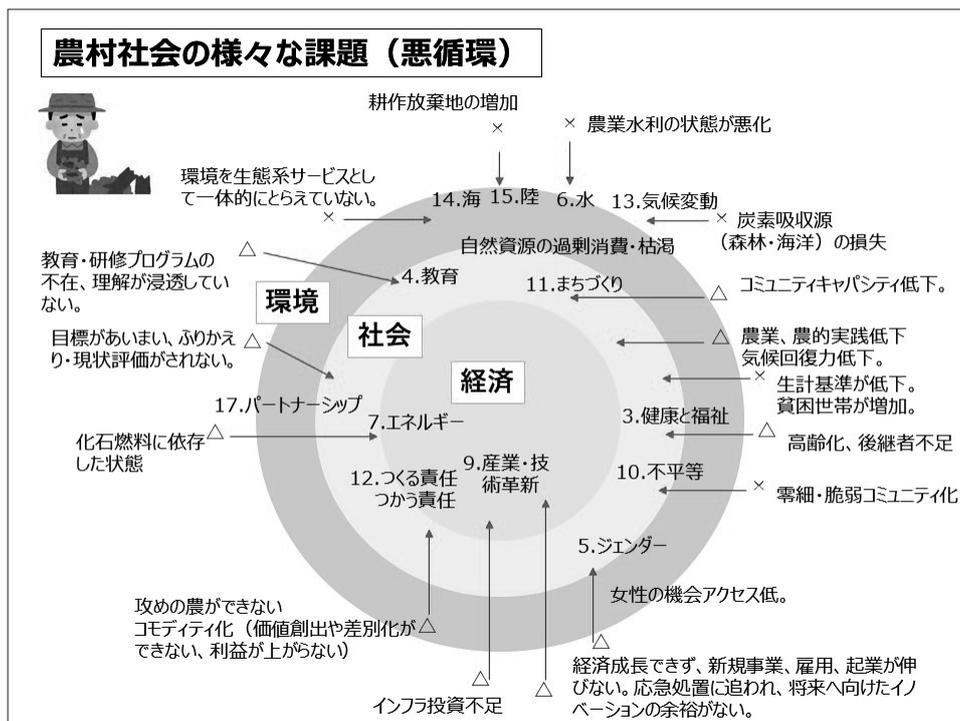


図3

す。そして学生はそのきっかけをつくる、トリガー(引き金)となる大いなる可能性を秘めています。

これらがまずソーシャルイノベーションの大きな考え方、流れということになります。

加えてアグリイノベーションについてひとこと申し上げます。「アグリ」という言葉は、アグリカルチャー=農という意味で使われますが、culture(文化)とはcultivate(耕す)という語源的意味で、農は文化的な行為です。教育、経験、交流、あるいは気付きなどを含めた言葉といえます。それをベースにさらに新しい変革をもたらそうというのが、アグリイノベーションであると解されます。

アグリイノベーションという言葉は、日本の造語ではなく欧米圏で使われています。特にカナダではアグリイノベーションプログラムというものが非常に大きな政策になっています。これを本気でやってみようという盛岡市さんと文京区さんに敬意を表したいと思います。

次はアグリイノベーションの説明図です(図5)。SDGsにひも付けしながら、さまざまな要素、視点を整理してみました。農にまつわるキーワードを書き出してみただけでも、アグリイノベーションにはこれだけの多様な視点があります。これらを動員し、うまくつなげて相乗効果を高める戦略ストーリーをつくっていく、イノベーションを起こしていく。これは一つのパズルのような作業になると思います。そこに学生さんが入るとそのパズルを上手く解くきっかけになると思います。

また、突破すると言いましたけれども、そう簡単に突破できません。ラグビーでも1試合中に何度もチャレンジして、ようやく数回トライできるでしょう。同じように、アグリイノベーションというのも、何かすぐに結果が出るわけではありません。何度も試行錯誤してようやく成功に至るでしょう。もしかしたら10回やっても成果が出ないかもしれない。それを理解した上でチャレンジし続ける中で、ある瞬間にトライが生



図4

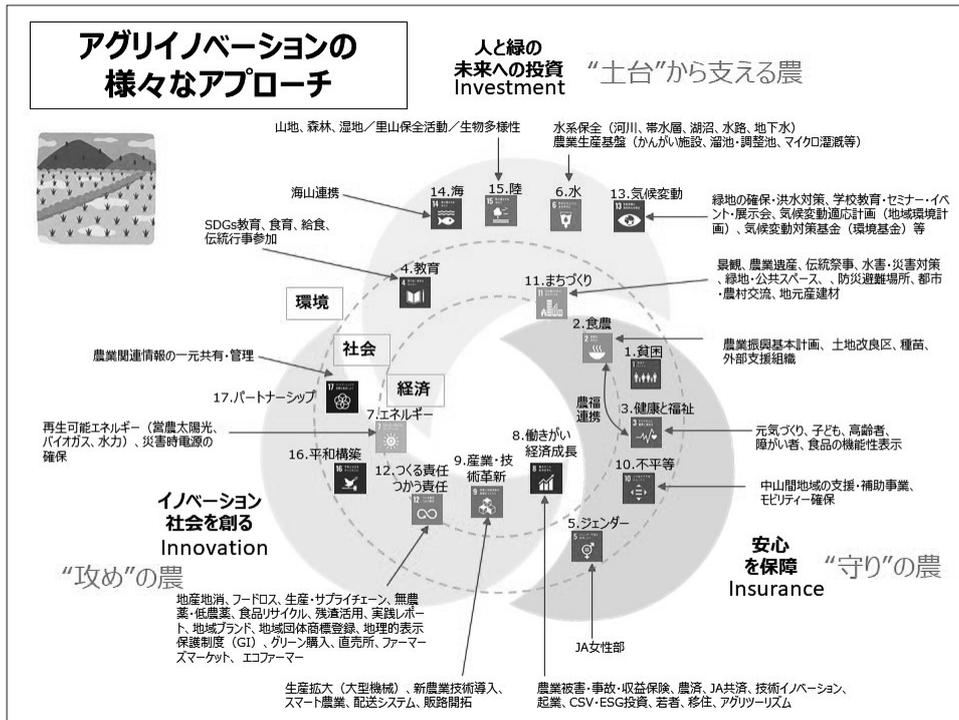


図5

まれる訳です。その時を求めて学生と一緒に取り組む、協同探究しながら試行錯誤する、ニッチな隙間からこじ開けていく。そのプロセスをつうじて人・地域・社会が共に成長する、そのこと自体が、学生にとっても地域の人にとっても生きがいになり、日常になってゆく。かけがえのない価値共創のプロセスであり、エコシステムであるといえます(図6)。

3. 協同探究から実践コミュニティへ

さて、では次に、どうやってそのような価値共創のモードに学生さんと地域の方々に入っていただけるかということが課題になります。私の視点は非常にシンプルです。学生さんの気持ちになってみてくださいということです。私は教員ですから日頃から学生と接し、かつ地域活動、地域づくりもしておりますけれども、学生さんがどういう気持ちなのか。後でパネルディスカッションのときにも学生さんの話しを直接聞いてみたいと思いますけれども、学生からみたとき、どういう地域に行きたいか、あるいは逆に行きたくないかであります。

大学生は若く、自分を見つめ、自分を探し、時には理想を求めながら、自分の成長を目指している存在であります。自己実現、自分が成長できる経験、その機会に出会える場所に行きたい。そのようなマインドのある社会的環境のできている場所に行きたいわけです。一方で学生は人間として成長途上の存在です。社会的経験もまだ乏しいでしょう。それでも無限の可能性ががあります。理想を語り、「協同探究」できる、失敗してもドンマイといってくれる、そういうマインドを持っていてくれる世界に行きたいのです。

もう一つは、「実践コミュニティ」です。地域の側からすると、学生さんが来てくれるのはうれしいけれども、具体的に地域は何をどうしたらいいのかわからないということがあります。学生さん頑張って、いろ

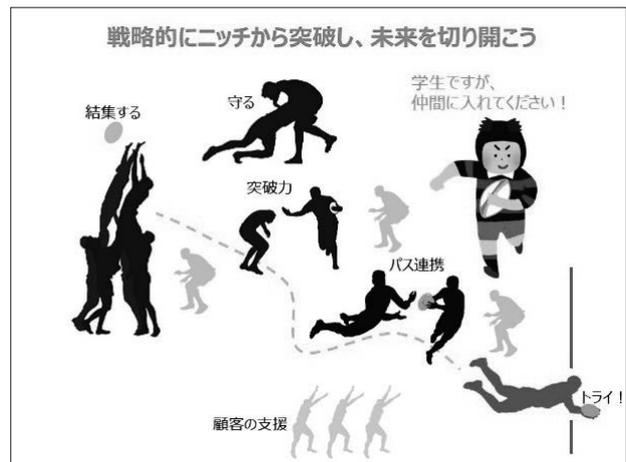


図6

いろ調べてくれ、情報をくれてありがとう、それで終わってしまったら学生さんとしては満足できず50点という気持ちなのです。それで終わってしまう地域には、学生はだんだん行かなくなります。ここがポイントだと思います。

ではその続きとは何か、それは「実践コミュニティ」ということです。いいアイデアであれば導入を検討してみよう、大学と連携して一緒にチャレンジしてみよう、そのかわりに大学にもサポートやフォローアップ調査をしっかり依頼する、導入が定着し成功するまでに数年かかることもあるでしょう。そのようなラボ活動の体制をつくり、しっかり引継ぎ体制を整えてもらう、そこまでいって初めて域学連携が回ってきます。このシステムがうまく回るまに学生は行きたいですし、地域の側もそれを回せる大学や学生グループに来てもらいたいと思います(図7)。

すなわち、別の言い方をしますと、相互作用です。英語で言いますとレシプロカル、互恵的という意味です。一緒に接触する中でさまざまなやる意味とか、新しいアイデアとか、新しい気づきが生まれて、だんだんそれは膨らんでくる。学生と地域の人々がそういう相手を持てる、そして地域にもヒントがあり、大きく何か動き出すということと一緒にできる町というものをつくっていく。これが求められているだろうと思います(図8)。

最近では、これを「イノベーションエコシステム」という呼び方をします。多様なネットワークが生きづいており、さまざまな情報やエネルギーが入ってくる、さまざまな角度からレスポンスが起きる、そこから価値共創が生まれる、新しいチャレンジが始まる、これが自律して稼働するシステムができるためには、参加者の信頼関係、コンセプトの明確化、様々な工夫、リソースの動員、メリットを担保する方法、それらを可能にする制度の組み立て、などが必要になります。これらができている圏域がイノベーションエコシステムです(図9)。

冒頭に、石川啄木の名が出ましたが、盛岡市と文京区は啄木が見つないだ縁とうかがっています。確かに縁のきっかけは啄木なのでしょうが、それ以後、さまざまな方がその縁を大切に、プラットフォームとして大きく育ててくださっていると思います。この自己成長運動、その仕組こそが大きな財産であると思います。

では、どんなふうにあグリイノベーションのネットワークにおいて育てていくのか、その条件や課題を考えてみたいと思います。大学では最近、PBL(プロジェクト・ベースド・ラーニング)が重視され、プロジェ

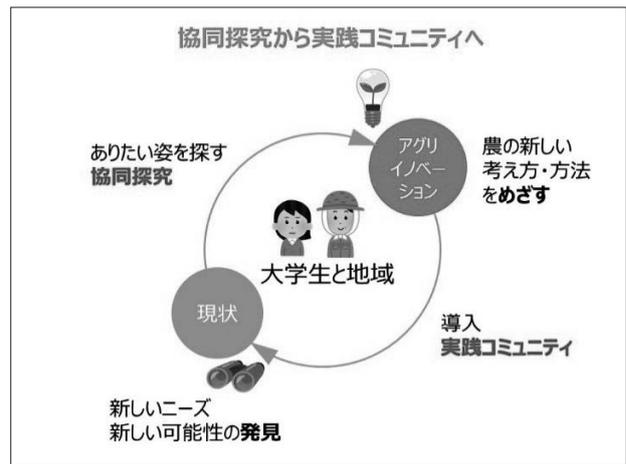


図7

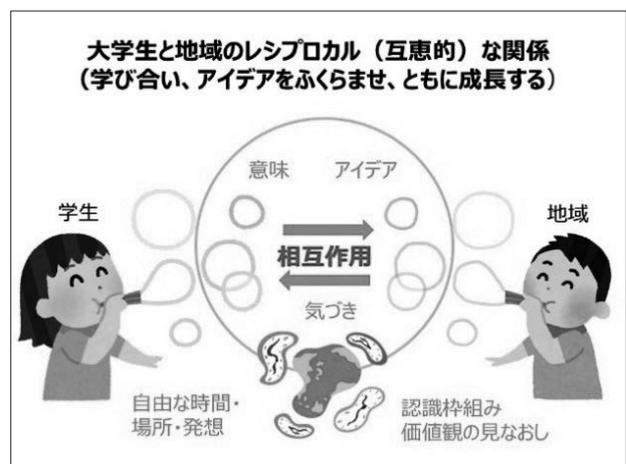


図8

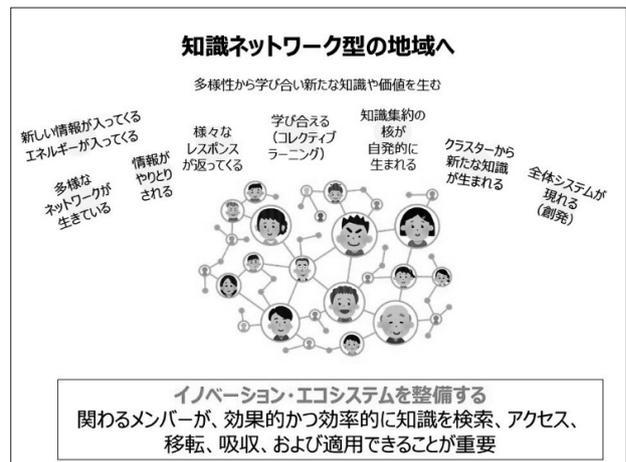


図9

クトを通じて学ぶというのが一般になってきました。教育用語では「状況に埋め込まれた学習」と呼びます。大学の教員や域学連携コーディネーターは、それがうまく回るように地域と協力しながらイノベーションエコシステムを整備していく必要があります。

PBL、協同探究、ラボ活動などのキーワードを出してきましたが、その成長の相互作用プロセスについてももう少し補足説明します(図10)。まず、この場合、大学生が起点です。大学生と農家生産者らとつながることで対話が始まります。パートナーが誰かといえば、例えば、生産者、生産地域、生産団体からです。その時の関係性の考え方が重要になると思うのですが、地域の方が「学生さんをサポートする」というふうには思わないでいただきたい。学生も、「地域を盛り上げに行く」というふうには思わないでいただきたい。それらは小中学生の農村体験プログラム、青少年交流プログラム、インターンシップ等であれば、そのとおりかもしれませんが、震災ボランティアをすると、自分が助けに行くつもりが行ってみたら自分がいろいろと気づかされた、逆に助けられたという経験をすることがあります。「状況に埋め込まれた学習」における関係性においては、支援する、手伝う、されるなどの考え方は時にじゃまになることがあります。誤解、期待外れ、不満、批判、不信心などの元になってしまうからです。

支援する・されるの関係性ではなく協同探求の関係になると、「問い」を軸にしながらさまざまな人が集まってきます。「何を話しているの？ 一緒にできることがあるでしょうか？ 私たちに不足しているもの何だろう？ 誰と協力すればできるようになるだろうか？」などの創発的な思考プロセスに入りながら新しい関係性を構築してゆきます。これは、バリューチェーンまたはバリューコンステレーション(価値の星座結合)と呼ばれます。職能でいえば、農家、直売所、工場、レストラン、ホテル等さまざまな方が関与してくる可能性があります。行政や地域内外の専門団体、研究所、大学等も加わり、調整しながら大きな動きに展開をしてきます。

学生さんも今日は聞いてくださっていますので、「状況に埋め込まれた学習」とは何か、わかりやすい比喩で申します。「砂風呂」ってありますね。自分で掛けて入って温まる、あれと同じです。砂を掛けて入り込んでいくのは自らの力です。学生の皆さんが自分からもぐりこみたい場所を探して、自分で砂をかけて首までどっぷりつかると、そして汗をかく。その状況を自分でつくる体験から自分なりの気づきをつかむ、こ

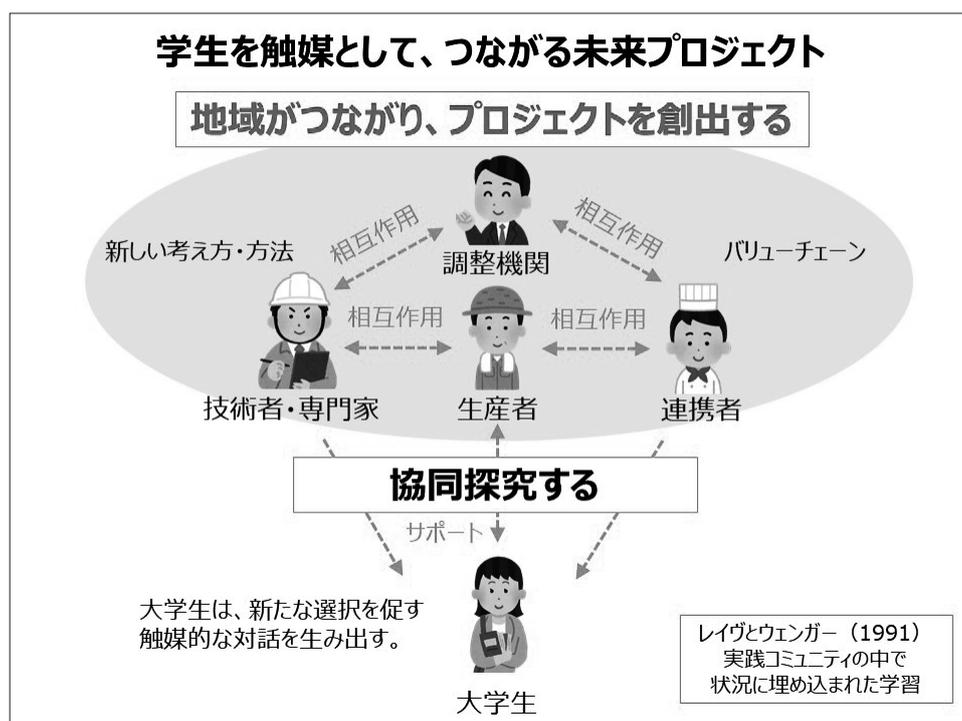


図10



図11

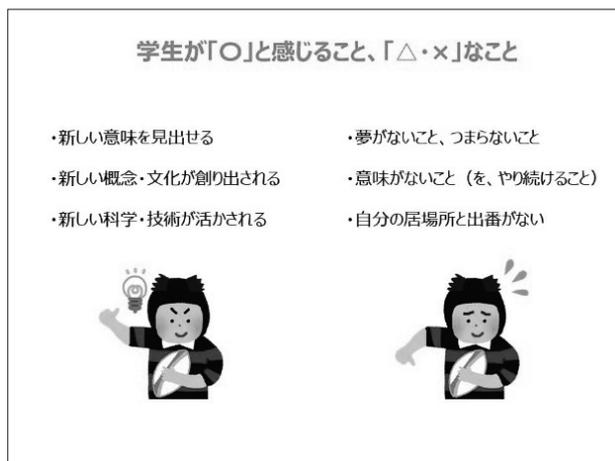


図12

れができる学生さんは、すごく伸びると思います。そういう学生さんを地域は待っていると思います。

言い換えますと、地域が本気だと学生も本気になる。または、学生が本気になると地域も本気になるということです。一方、最近の学生さんはたいへん忙しいです。バイトはもちろん、インターンシップなどの経験が就活で求められる傾向にあります。自分の体が空いた時間を何に割り当てるか戦略的に考えます。そのような中で、この地域はかかわる価値があると選択される地域になる、そこが運命の分かれ道と思います(図11)。

また逆に言いますと、学生さんから見て「○」と感じること、「△」「×」と感じることなどがあるわけです(図12)。地域の側に申し上げたいのですが、学生さんたちは、新しい意味、新しい概念や文化、技術や科学、そういったものを求めて見いだせる場所を探しています。逆に言いますと、学生は、夢がないこと、つまらないこと、意味がないこと、意味がないのにやり続けていること、それを自分(たち)に対して問いかけない、そして関わったのに自分の居場所や出番があまりないところ、そこには恐らく行かなくなり、いつの間にか他に行ってしまうだろうと思います。

4. アグリイノベーションのためのワークと準備

こうしたプロセスを図13、14に示しました。詳細は図で、のちほどゆっくり読んでいただければと思います。図13が主に学生側に求められること、図14は地域側に問われることです。学生さんにはぜひ、最初によく地域を選んでもらいたいです。そこに行く以上、本気になって一緒にやりましょう。「よし行くぞ」というメンタルでしっかり覚悟をつくることがお互いに問われるというのが、1ページ目に書いてあることであります。

それから図14。これは、今度は地域側に考えてほしいことですが、せつかく大学や学生が来て研究や提案をしてくれるのですが、地域の側がその成果を選択、活用するか、判断すべき場面にたびたび直面するわけです。学生さんからのアイデアに対して、「興味深いが、ホントにやるとすれば大変」「自分たちの能力でやり切れるか」「失敗した場合の損失や責任は誰がとるのか」など、さまざま現実的に考えます。そうしたときに、「スモールスタートで実験してみる」などがあります。成功と失敗は、5回に1回か、10回に1回かは分かりませんが、それでもやってみようというふうになれば、そこからアグリイノベーションというのは起きていくだろうと思います。

ただし、やみくもに突っ込んでいけばいいわけではもちろんありません。「レバレッジポイント」とシステム論やイノベーション論で呼ばれていますが、社会構造に介入する“ツボ”があり、そこをちゃんと探すことです。そこから始めることが手堅い選択になります。戦略的にニッチを管理しながら、機会を大きくして

アグリノベーションのためのワークと準備①

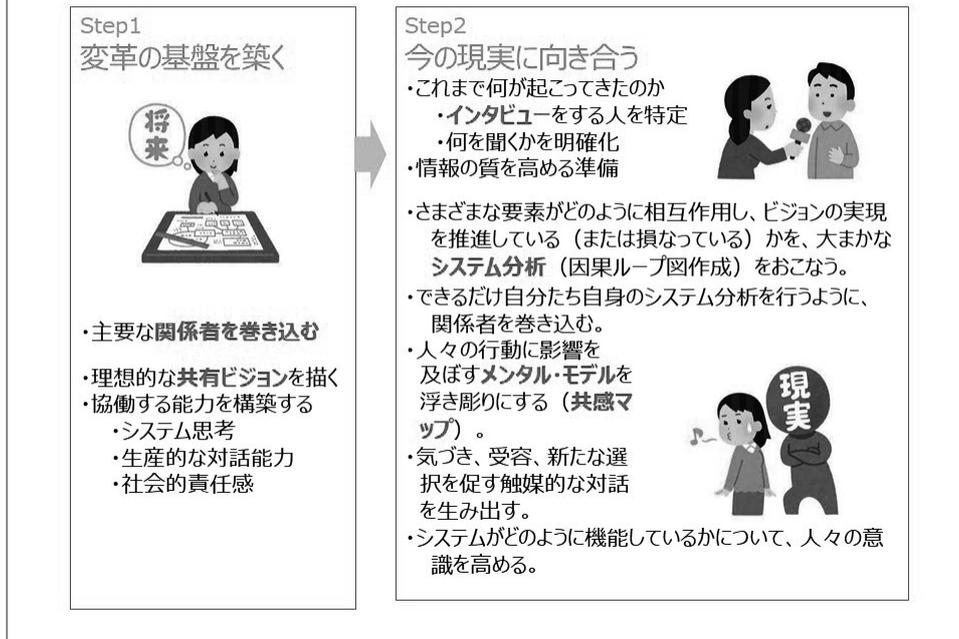


図13

アグリノベーションのためのワークと準備②

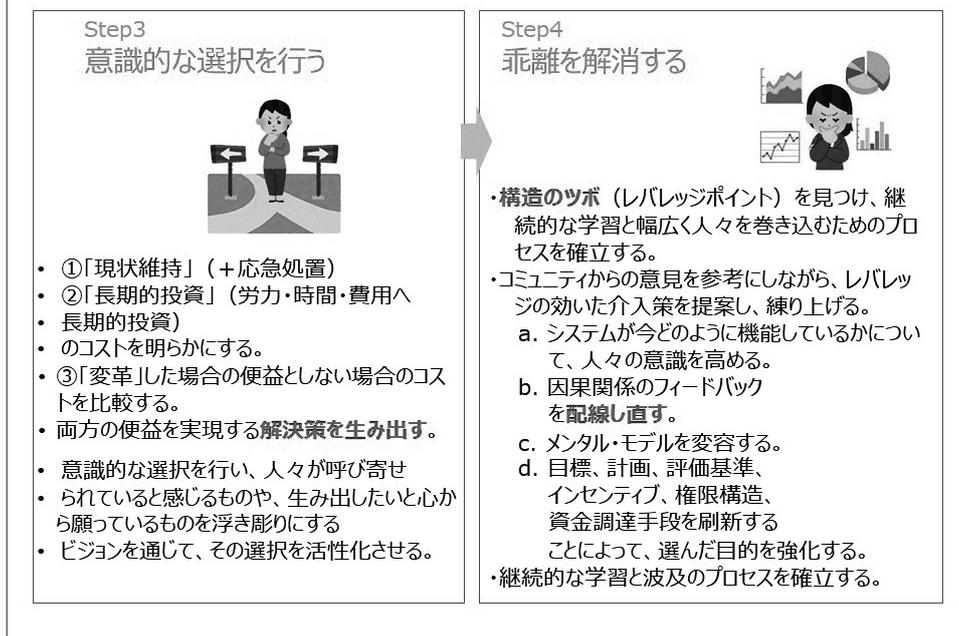


図14

いくということをしっかり考え、リスクを最小限にするように考える。さまざまな知恵を結集すれば、レバレッジポイントは広がってきます。構造的な再編の戦略シナリオ化が重要です。

図15は、構造のツボ探しのワークで使う図です。この図は、「イノベーション」、「投資」、「セーフティネット」の3つの機能サイクルから構成されています。イノベーションは先ほどから申しあげているとおりリスクがあります。イノベーションと言うと、「そんな簡単にできない」というレスポンスが返ってきがちです。リスクを低下するためには、セーフティネットが必要です。ジャンプして落ちてでも下にネットがあれば安心です。

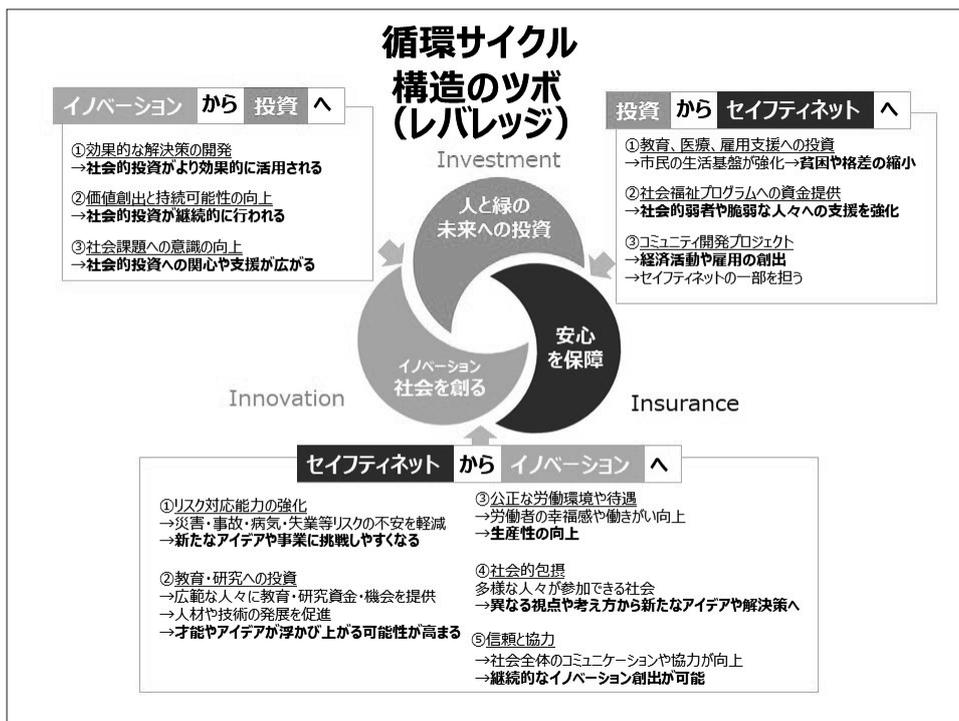


図 15

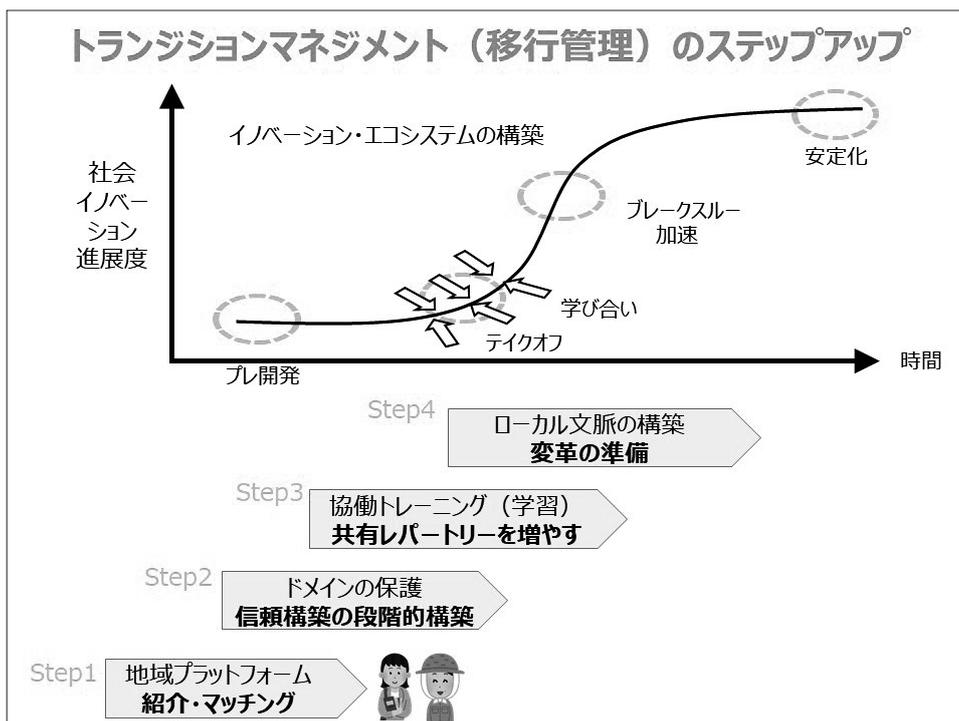


図 16

地域と大学が協働でアグリイノベーションを推進するのであれば、セイフティネットをあらかじめ考慮していただく必要があります。もちろんセイフティネットをつくるのは大変です。そのために投資が必要になります。最近ではESG投資が注目されています。投資がセイフティネットをつくります。セイフティネットがあれば果敢にイノベーションできます。このサイクルができることが、アグリイノベーションには必要です。

次の図16は、イノベーションが始まった後のトランジションマネジメント（移行管理）です。イノベーションのサイクル（図15）を時間軸に展開したものです。これはイノベーション理論の説明で使われる図です。

この図が意味するのは、イノベーションの4つの段階です。初めに、準備の段階があります。次に離陸の段階があります。ここまでしっかり学びのエコシステムができていないと、付いてこれられない人が出てきます。誰ひとり置いていかないという気持ちが重要です。離陸する瞬間が一番、危ないわけです。うまく離陸すれば、安定してきます。飛行機でいえばシートベルトを外してもいい状態になります。

離陸の段階、学び合いのエコシステムの段階で、重要なキーワードは、イノベーションを乗り越えるだけの能力、可変的な対応力をあらかじめ身に付けておくことです。いわば思考や行動の「レパートリー」を増やすことです。たとえば、カラオケに行く、いきなりマイクが回ってきて、「歌ってください」といわれても、歌ったこともない歌を歌うのはちょっと勇気がいります。練習したことがあると歌えるわけです。つまり地域の方は、平素から、学生さんが来たときに何を話すか、何を考えるか、突飛なことをいわれたらどうするか、そういうレパートリーをふやすトレーニングを日ごろからしていただけたらと思います。大学と地域が1、2年も付き合っていくとお互いに頃合いが分かってきて、一緒にやり方もコツも都合も分かってきます。それが、このレパートリーを増やす段階です。そして何となくお互いのやり方が分かって、一緒に歌えると信頼関係が構築できたら、いよいよイノベーションを実際に実装、推進していく段階に入ります。ここまでいきますと、地域が変わっていく状態になります。

一つ、制度として行政はイノベーションのスマールスタートをどうサポートしたらいいのかについてお話しをします。これは、カナダですけれども、「イノベーションファーム」という仕組みがあります(図17)⁽¹⁾。イノベーションの実験場として学生さんの研究の受け入れウエルカムと制度で位置づけている農園のことです。ここでは、学生さんを受け入れ、共に議論し、社会実験を行い、成果とデータを共有します。新しい取り組みを真剣に、かつリスクを最小化しながら始めましょう、データは大学がきちんととって分析してくださいと。大学と農園がお互いサインをして、それが地域にセットアップされ、イノベーションにもっていきます。行政は双方の役割、権利義務を定め、制度的に担保したり、社会実験の成果を公表したり、加えて一部財政的にサポートしていきます。

文京区と盛岡市さんは包括連携協定がすでにあるわけですから、この大きな傘の下に、今度はイノベーションファームを設置していく。そこに学生さんが参加すると。例えば、イノベーションファームをやっている盛岡市の農園と文京区の提携レストランが新しいチャレンジをしてみる、そういうふうにやっていると、だんだんイノベーションが地に足をつけながら回り始めるかもしれません。

まとめ

日本の農業、農村社会は、さまざまな課題に直面しています。アグリイノベーションは、きっかけになる魅力的なアプローチだと思います。冒頭でラグビーの例を出しましたが、大学との連携



図 17

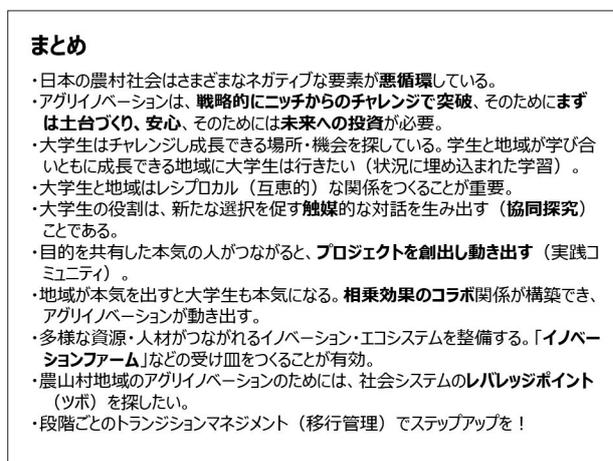


図 18

でチャレンジで突破するのは大きな可能性があります、WinWinの実施は工夫が必要です。お互いのレパートリーをすこしずつ増やしながらイノベーション力を高めていく必要があります。それをつないでいただいて、ぜひ盛岡市から、ぜひ文京区から、イノベーションが起きることを、心から期待をしています。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- (1) <https://www.manitobacooperator.ca/news-opinion/news/innovation-farms-to-allow-agricultural-technology-testing-on-commercial-operation/>

アグリイノベーション事業を語る

盛岡市政策統括特別参与
熊谷俊彦

はじめに

ただ今紹介いただきました、盛岡市役所の熊谷と申します。私のほうからは、アグリイノベーションの事業実施数に至った経過とか、事業概要を説明したいと思っております。



写真1 講演の様子



写真2 講演の様子

1. これまでの経緯

最初にお話があったとおり、平成31年2月、文京区と盛岡市とは歌人の石川啄木の生誕と終焉の地を縁にいたしまして、友好都市連携を調印いたしました。これを契機といたしまして、文京区と盛岡市でさまざまな事業をやらうということで、役所としていろいろ考えておりました（図1）。そういった中、とある新採用職員がこんなことを言ってきたんです。「文京区には大学が多い。盛岡市玉山地域の農業農村をステージに大学のゼミのフィールドワークを実践してもらって、大学の持っている知見や学生の斬新なアイデア、そういったことによって地域課題を解決できるのではないのか。この取り組みは盛岡市、文京区にとっては友好都市提携の具体的な成果でもあるし、学生にとっては自己研さんにもなるし、さらには就職時のエピソードづくりとしても有効じゃないか」と。私も行政経験が長くて、大体、物になるかどうかというのを何となく経験上、○×付けるような傾向にあったんですけども、雰囲気的にもしかしてあるはいけるかな、でもちょっとどうなのかなということで半々くらいでした。でも、まずやってみようというのが私のやり方だったので、じゃあ、まずやってみよう、ということで取り組んでみました。そういった中で大学を紹介していただきました文京区のアカデミー推進部アカデミー推進課の皆さまがた、本当にありがとうございます。この場をお借りして御礼を申し上げます。

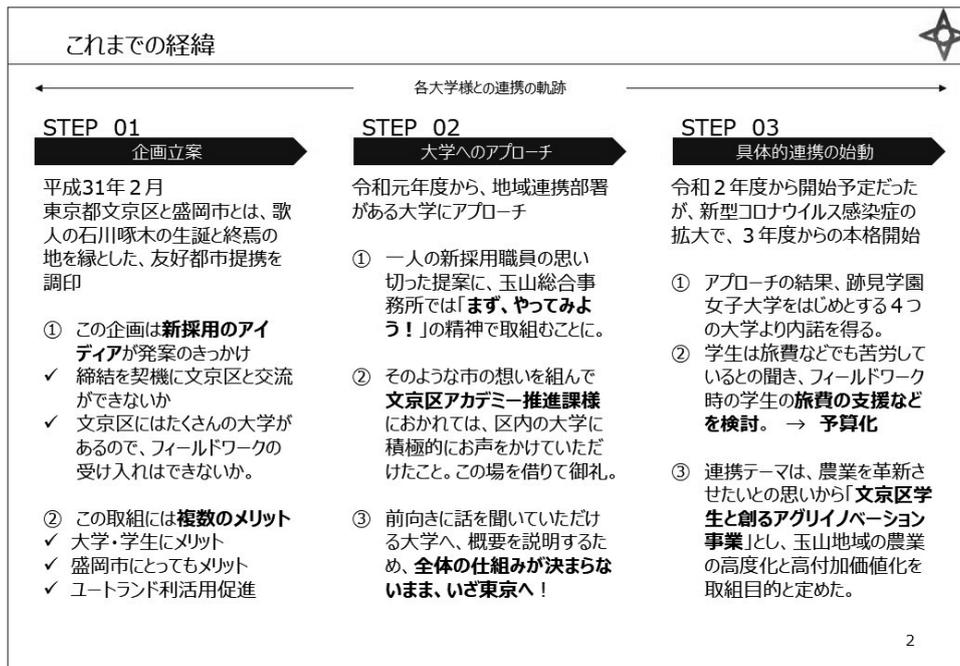


図1



図2

平成31年2月に提携して、時代が5月1日から令和元年になりましたけれども、実はその時点ではどういいうスキームかというのがはっきり決まっておきませんでした。ちょっと生煮え状態だったんですけども、まずやっという事で、いざ東京へと最初に来たのが跡見学園女子大学様でございます(図2)。令和元年5月9日、4年前です。手前にいらっしゃるのが土居先生でございます。奥の若い職員が新採用職員で、この職員がアイデアを出しました。手前が私です。この後すぐ東洋大学様に行きまして、その後、拓殖大学様、東京大学様ということで、結果的に四つの大学からOKということになりました。

しかし、土居先生からも言われたのですが、学生は非常にお金がかさむ。なので、東京から盛岡に行って、泊まってというのは非常に費用負担が大変なので、そこを何とかならないでしょうかというお話でした。なるほど、確かに自分が学生時代を振り返ってもそうだなということで、盛岡に戻って財政当局と

これまでの経緯
<p>これまでの文京区学生と創るアグリノベーション事業に係る経緯は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 文京区との相互交流を促進する第一の事業として <ul style="list-style-type: none"> 本市玉山地域の農業の高度化・高付加価値化を目的とした区内4つの大学との産学官連携事業を実施 → 令和2年度から実施することに <div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; margin: 10px auto; width: 80%;"> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 事業名は、インパクトのあるものに <ul style="list-style-type: none"> 農業を革新させたい、稼げる農業にしたいの思い → 「文京区学生と創るアグリノベーション事業」 </div> <ul style="list-style-type: none"> ✓ アグリノベーション事業の特色 <ul style="list-style-type: none"> 盛岡市が、大学で行う「フィールドワークにおける学生のテーマ設定、費用の支援や地域へのつなぎ」に積極的に関わっていること

図3

お話をして、「じゃあまず、その分の予算は見ますから」ということで、そこはクリアしました。文京区との相互交流促進する事業の一つとして、名前についていろいろ迷ったのですが、この際インパクトのある「アグリノベーション事業」というふうになんとなく大げさにしました(図3)。

事業の特色は、大学で行っているフィールドワーク、学生のテーマ設定のお手伝いをしましょう、それから費用の支援や地域へのつながり、例えば短角牛であれば、ここの農家さんに行けばお話、聞いてもらえますよということ、私たち行政も一緒に行ってそこをつなぐ、そういったことをやっております。

2. 「文京区学生と創るアグリノベーション事業」について

事業概要は先ほど言ったとおりです。実施期間は、現時点では令和3年4月1日から来年の3月31日までの3カ年事業です。今年度の取り組みをもって、第1クールを終えたいなというふうに思っております。連携スキームは、盛岡市からすると、盛岡市が抱える農業課題の解決に向けた取り組みの推進であり、大学さまにとっては、玉山地域の農業課題を題材とした、問題解決型学習の実践の場ということを通じて、相互連携して、玉山地域の持続可能な農業を実現すること。そのときに、学生の皆さまへの移動、宿泊の支援をしますよということ(図4)。

具体的な支援の中身はこうです(図5)。1番目は、市は各農家さんとの間を取って、大学に対し調査研究に向けた各種情報提供を行います。2番目、盛岡に来る日程が決まります。3番目、旅行代理店に盛岡市では、新幹線と宿泊先の手配をします。市内の移動は公用車。公用車といってもそんな立派なものではないのですが、公用車で全部移動をアシストするというごさいます。

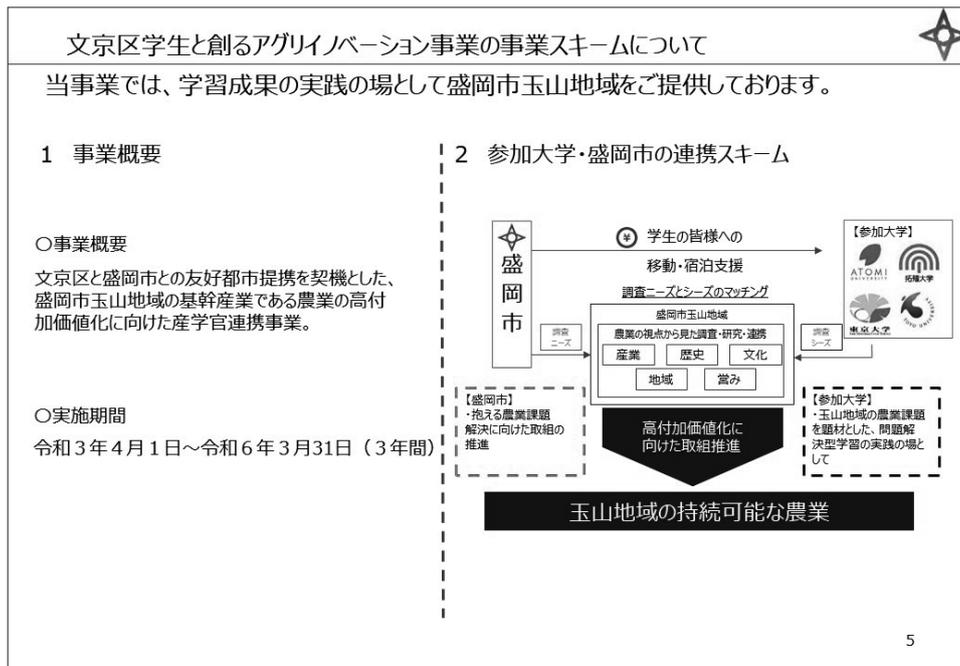


図4

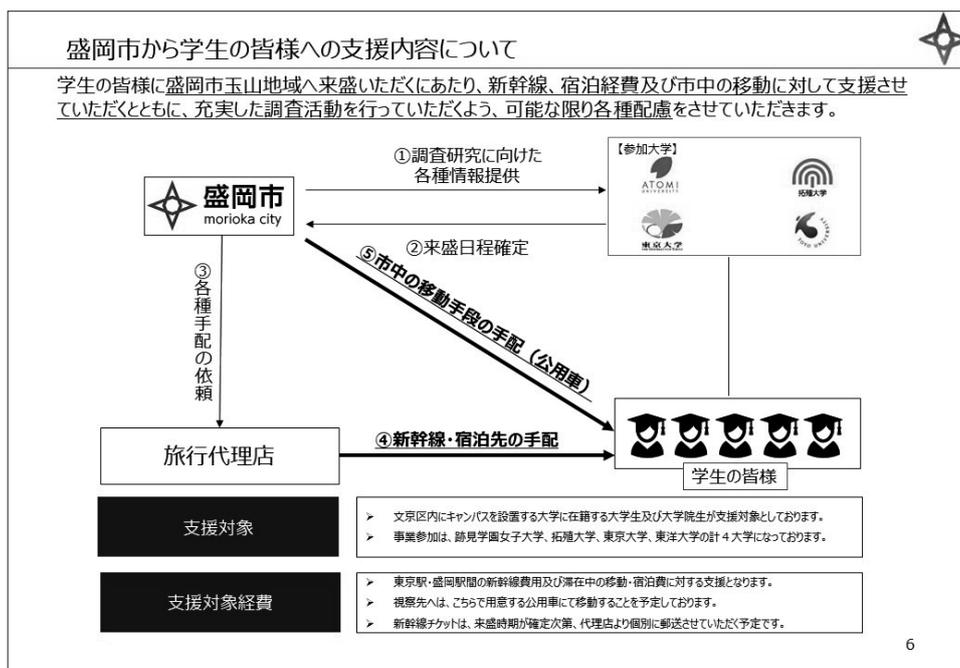


図5

3. 盛岡市（玉山地域）の農業課題

ここで、盛岡市玉山地域が抱えている農業の課題、実態について若干触れてあります(図6)。いっぱいあるのですが、大きくいって三つ掲げております。1点目、中山間地域で急斜面とか山が多いです。一般的に平場に比べて条件不利なので、なかなか効果的な、効率的な農業ができないというのが一つです。2番目ですが、産業構造的課題として1次産業、2次産業、3次産業の産業間連携がないので、付加価値を出しにくい。3点目、これとも関係しているのですが、6次産業化等の商品開発等が遅れておりました、高収益化に向けた取り組みに課題がありますということです。

それからもう一つ大きい問題、これは玉山地域だけじゃなく全国どこでもそうなのですが、農業の就業

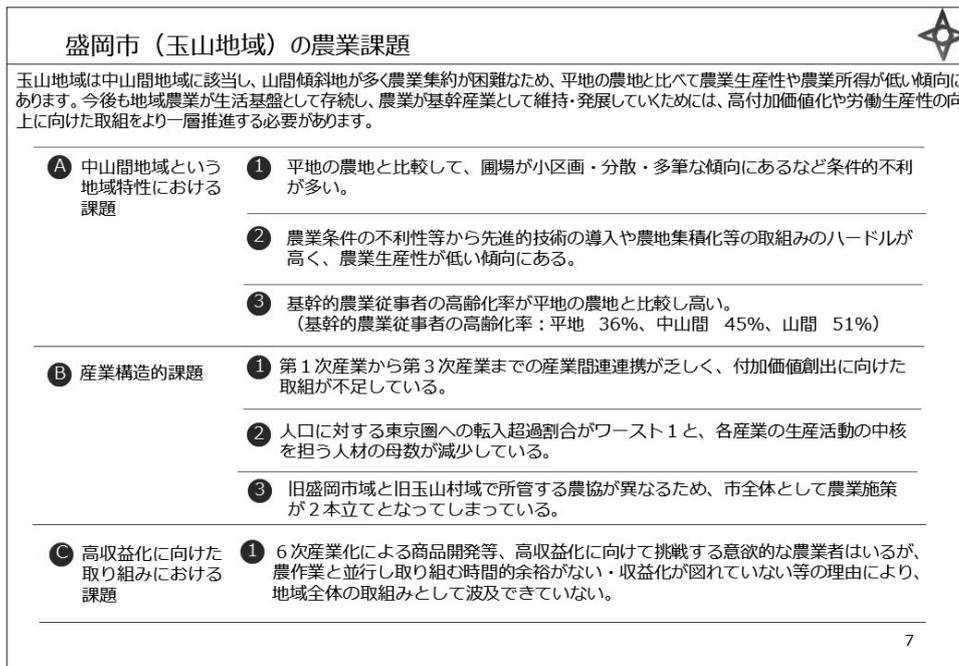


図6

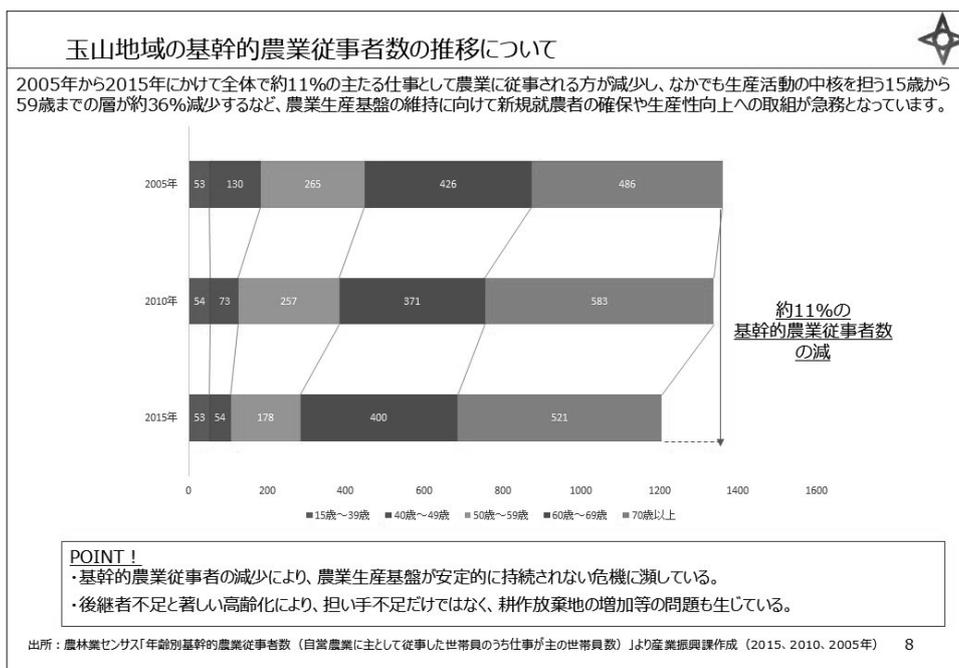


図7

人口がどんどん減っているということです（図7）。この10年間を見ましても、2005年から2015年にかけて全体で11パーセント減っております。特に若年層です。60歳以下の人たちがどんどん減っているということで、高齢化と農家数の減少で農業、農村が維持できなくなりつつあります。

ここで、アグリイノベーション事業が玉山地域の農業に果たす役割についてです（図8）。今お話ししたとおり、さまざま課題を抱えている玉山地域の農業を持続可能にするために、フィールドワークや大学の持っている専門的知見を生かしまして、課題を抽出します。そして地域調査をして課題を抽出して検証して、そして農業課題の解決、未来の農業の検討を通して玉山地域の農業の持続可能性を上げていきたいなと思っております。

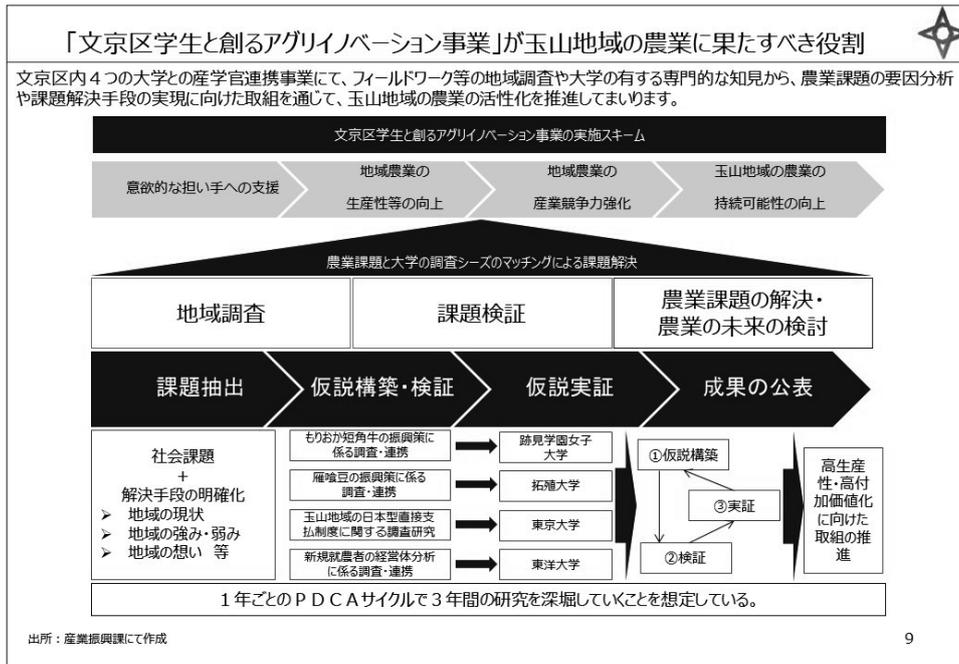


図8

4. 大学ごとの調査テーマ

各大学でさまざま学部が異なっておりまして、おのおの特色のあるテーマに取り組んでいただいております（図9）。跡見学園女子大学様につきましては、地域コミュニティデザインの視点から見た、もりおか短角牛の現状と振興策の検討です。これは去年、玉山の短角牛振興ツアーというのをやったときの写真です（図10、11）。拓殖大学様には、雁喰豆、黒平豆の生産から販売までの、一連の工程における課題解決に向けた取り組みの推進についてということで、頑張ってくださいとお願いしております。拓殖大学様は工学部だけではなくて商学部とも連携いただきまして、栽培の部分では土壌センサーを入れて、豆の選別にはセンサーを入れ

大学ごとの調査テーマについて

当事業へは文京区内4つの大学から学生の皆様に御参加いただき、大学ごとに調査テーマを協議の上で選定し、調査・連携を進めております。

大学名（50音順）	参加学部	参加形式（R5）	調査テーマ
跡見学園女子大学	観光コミュニティ学部	ゼミ単位	地域コミュニティデザインの視点から見た、もりおか短角牛の現状と振興策の検討
拓殖大学	商学部・工学部	ゼミ単位	雁喰豆（黒平豆）の生産から販売までの一連の工程における課題解決に向けた取組の推進
東京大学	農学部	研究単位	日本型直接支払制度に関する調査研究
東洋大学	経済学部	ゼミ単位	新規就農の農業経営体から見る、多角化経営の分析と将来展望について

10

図9

✦

「文京区学生と創るアグリノベーション事業」の取組例

大学名 (50音順)	参加学部	参加形式 (R5)	調査テーマ
跡見学園女子大学	観光コミュニティ学部	ゼミ単位	地域コミュニティデザインの視点から見た、もりおか短角牛の現状と振興策の検討



図10

✦

「文京区学生と創るアグリノベーション事業」の取組例

大学名 (50音順)	参加学部	参加形式 (R5)	調査テーマ
跡見学園女子大学	観光コミュニティ学部	ゼミ単位	地域コミュニティデザインの視点から見た、もりおか短角牛の現状と振興策の検討



▲短角牛振興ツアーの様子

▼短角牛振興ツアーの打ち合わせ



図11

て、そして売るために貸店舗のヒアリングとそういったことをやっていただいております (図12)。東京大学様は、去年の例でいくと日本型直接支払制度に関する調査研究ということで、過去からの膨大なデータを行政のほうから提供して実際に、この直接支払制度が有効に機能しているかどうかを検証していただいております (図13)。最後、東洋大学様でございます (図14)。夏イチゴを栽培のために新規就農した農家さん、今ハウスに入っていますけれども、こちらの夏イチゴをどうやれば売れるのかということを一生涯懸命研究いただいております。夏イチゴを使ったスイーツを作って、レシピコンテストなんかもやっていただいております。おかげさまで、このイチゴ農家さんのイチゴは売り切れて、ハウスも2棟、この4月から増やしております。この後、詳しく各大学さまの取り組み状況があるということですので、跡見学園さんの状況だけ若干、



図12



図13

触れたいと思います。

もりおか短角牛については、こんな形で取り組んでいただいております（図15）。まず、課題のところでございます（図16）。もりおか短角牛というのは盛岡市で生み、育てたものなのですが、流通量が和牛全体の1パーセント未満と希少なこともあって、なかなか生産を持続するというのが課題だということです。そのために、地域内外への認知度を上げることを考えて、テーマを設定いただいております。スタートした時点ではまだコロナなかったんです。さあ、やろうと思ったらコロナがどっと増えまして、盛岡に来ているフィールドワークをするということに大きな制約が加わりました（図17）。その当時の学生さんは大変、苦労されたと思います。ということでウェブ会議を使って、農家さんともいろいろやりとりをしました。そ

「文京区学生と創るアグリノベーション事業」の取組例



東洋大学	経済学部	ゼミ単位	新規就農の農業経営体から見る、多角化経営の分析と将来展望について
------	------	------	----------------------------------



▲新規就農者の圃場調査の様子



▼令和3年度に開催したレシピコンテストの上位5作品

図 14

跡見学園女子大学の取組例から



- ① 盛岡市の農業課題 ※ 前のページで掲載
- ② そのうち、「もりおか短角牛」が抱える課題
- ③ 取組内容
 - ・もりおか短角牛生産農家、精肉業者からのヒアリング
 - ・玉山地域の郷土料理等を通じた地域の方々のヒアリング
 - ・もりおか短角牛のPRをどうするか
 - ・「もりおか短角牛モニターツアー」を企画
 - ・東京のアンテナショップ「銀河プラザ」での販促会 など
- ④ 成果（中間報告会から）
- ⑤ まとめ

16

図 15

② そのうち、「もりおか短角牛」が抱える課題



- もりおか短角牛とは、和牛4品種のうち、日本短角種を本市内で生み育てたもの
- 日本短角種自体は北海道及び東北が主要の産地であり、岩手県は日本一の生産量
- 流通量は和牛全体の中で1%未満と極めて希少である一方
- 生産者や飼育頭数の減少による持続的な生産が課題



○ こうした背景を元に、もりおか短角牛の流通構造上で抱える課題を抽出するとともに、地域内外への認知度の向上に向けた取り組み



テーマ：
「地域コミュニティデザインの視点から見た、もりおか短角牛の現状と振興策の検討」と設定



岩手県立大学の学生も、一緒にフィールドワーク

図 16

<p>③取組内容</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 活動当初は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、本市に訪問しての現地調査が困難 ○ ウェブ会議ツールを活用した生産者とのヒアリング ○ 実態を把握するためのアンケート調査等の分析を実施 ○ 令和3年度末には玉山地域の現地調査を実施、現状と課題の把握 生産者のほか、卸売業者、皮革事業者等のもりおか短角牛に関わるステークホルダーへのヒアリング ○ 令和4年度では、地元住民の認知度向上となる取組 <ul style="list-style-type: none"> ・生産現場を見学できるモニターツアー ・首都圏の住民に向けたPRイベントを岩手県のアンテナショップであるいわて銀河プラザで開催するといった実践的な活動を展開 	
<p>18</p>	

図17

<p>③跡見学園女子大学の取組</p>	
<p>令和4年度には、もりおか短角牛のPR及び玉山地域の郷土料理等を通じた地域の方々との交流を目的として、「もりおか短角牛モニターツアー」を企画・実施 現在は、「もりおか短角牛ツアー」の商品化に向けて、盛岡市内の観光会社との打ち合わせを実施</p>	
	
<p>学生が生活改善グループの代表からヒアリング</p>	
<p>19</p>	

図18

れからアンケート調査もやってもらいました。令和3年度には、やっと盛岡に来られるということで、生産者の他、卸売業者、比較事業者等のヒアリングを行いまして、昨年度はモニターツアー、それから岩手県のアンテナショップで首都圏の方に向けたPRイベントをやっていただきました。写真は去年、跡見学園の学生さんたちが生活改善グループの代表からお話を聞いているところです(図18)。

5. 成果とまとめ

最後のまとめですけれども、こういった取り組みを通して、まず市としては、先ほど言った玉山地区が抱えているさまざまな農業の課題、これについて解決の糸口を見つけられるということが成果になろうかと思

います(図19)。ただ学生にとっては、盛岡を舞台にフィールドワークを行うことによって成長があるだろうと思います。

私が、この事業で結構、面白いなと思ったのは、生産農家の反応なんです。これは、言われたことをそのまま書いたものです。「若い子が来て生産農家や現場を見てもらってうれしい」、「生産の場を肌で感じてもらってうれしい」、「また来たいと言ってもらえてよかった」、「これを機会に盛岡に来て就職してくれたらいいな」ということです。中山間地で条件不利の中でも、東京の若い学生さんたちがちゃんと来て、いろいろ話をしてくれたということで、生産現場はそれまでになかった大きな自信とか、あるいは可能性というものを得られたんじゃないのかなというふうに思っているところでございます。

まとめとして3点、挙げております(図20、21)。1点目が地域外からの視点。2点目が既成概念にとらわ

④成果(中間報告会から)

- 市として
本事業を通じ、他の大学生との刺激を受けながら研鑽を積んでいただくとともに、本市が抱える農業の諸課題を解決する糸口を共に見出していくことを期待
- 大学として
学生が、盛岡を舞台に調査シーズ(たね)でフィールドワーク → 学生が成長
- 生産農家からの反応
 - ・若い子が来て、生産農家や現場を見てもらってうれしい
 - ・生産の場を肌で感じてもらってうれしい
 - ・学生からまた来たいとの発言をもらってよかった
 - ・これを機会に、盛岡にきて就職してくれたらいいな
- 跡見学園は、今回、岩手県立大学の学生ともいっしょに研究を展開
- 副次的なものとして
学生と生産者が接するなど、関係人口や交流人口増加の期待も

20

図19

⑤まとめ

玉山地域が抱える農業分野の課題を題材として、これまでの学習成果の実践の場として実習・検証いただくとともに、地元関係者との積極的なコミュニケーションを通じて、地域農業の未来について地域の当事者が考える機会になればと思っております。

keyword	keyword	keyword
01 地域外からの視点	02 既成概念に捉われない 自由な発想	03 玉山地域への 興味関心の醸成
<ul style="list-style-type: none"> ✓ 日本の最も大きな消費地である、東京都の消費者の視点から見た玉山地域農畜産物の価値の再定義。 ✓ 他の産地と比較した場合の、玉山地域の農業課題の洗い出し。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 既成概念に捉われない、学生ならではの自由な発想から得られる、玉山地域の農業への示唆。 ✓ 学生とのコミュニケーションから得られる先端知識等の農業者への知的な刺激。 	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 当アグリノベーション事業を通じて、玉山地域に対して興味関心を持っていただけたらと思っております。

出所：産業振興課にて作成
21

図20



- 盛岡でのフィールドワークからより多くの成果に期待
- 引続き、跡見学園女子大学の皆様をはじめ、文京区内の参加大学と連携しながら、事業を展開

22

図21

れない自由な発想があるのだろうと。そして、玉山地域への興味、関心の醸成。こういったものが、この事業から得られるのじゃないかなと思っております。今後とも、いろんなものに大きく期待をしておりますので、皆さまがたのご協力をお願いしたいと思います。

6. 今後の展開

最後に今後の展開ですけれども、中山間地というのは玉山地域だけではなくて日本あちこちにありまして、ここで今やっていることをきちんとまとめて、それを他の地域で実践することができれば、ここから得られたものを他の地域に横展開できるんじゃないのかなと思うと、今やっていることはある意味、社会実験的なものだなというふうに考えております（図22）。それから現在は、農業ということにピンポイントでやっ

今後の展開	
<ul style="list-style-type: none"> ○中山間地域の課題に向き合う社会実験としてできないか ○中山間をフィールドとして 文京区の学生が、調査・研究して成果をまとめ ○類似の中山間地域はたくさんあるので、 これらの成果を、地域の発展につなげたい 	

23

図22

ておりますけれども、農業に限らずさまざまな分野のことも今後、文京区の学生さんたちといろいろ考えていけるのではないのかな、例えば環境問題とかいろいろあろうかと思います。この事業は、今年度で終わると言いましたけれども、できれば来年度の令和6年度から第2クールとして、次の3年間をやっていきたいなと思っております。次の3年間に向けて、文京区の学生さんたちと意見交換しながら、地域の人たちとも意見交換しながら、どんなテーマに取り組んでいけばいいのかなということを、深掘りしていければというふうに思っております。私からは以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

—文京区の学生は盛岡で何を学び感じたのか—

- ・磯道 駿介 東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻修士1年
- ・和田 乃英加 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科篠崎ゼミ4年
- ・岡野 弥生 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科篠崎ゼミ3年
- ・土屋 祐太 拓殖大学工学部前山研究室4年
- ・佐久間 優衣 拓殖大学商学部田嶋ゼミ4年
- ・早田 宰 早稲田大学社会科学総合学術院教授
- ・熊谷 俊彦 盛岡市政策統括特別参与
- ・川副 早央里 跡見学園女子大学観光コミュニティ学部観光デザイン学科助教

川副 お待たせいたしました。これより、後半の部のパネルディスカッションを開始いたします。最初に、各大学研究室、ゼミで取り組んでおられますアグリイノベーション事業について、簡単にご紹介いただきます。最初にご報告くださいますのは、東京大学大学院農学生命科学研究科、農業資源経済学専攻、修士1年の磯道駿介さんです。磯道さん、よろしくお願いいたします。

磯道 皆さん、こんにちは。東京大学大学院農学生命科学研究科の磯道駿介と申します。普段、玉山地域とかで、中間報告会で発表する際は大学名順ですので、3番手で落ちているんですが、きょうなぜか1番手で若干、緊張しているところがあります。なので、ちょっとかんでしまったりしたときは、温かく見守ってくださるとありがたいです。

では、自分の報告を始めさせていただきます。今日は、玉山地域における景観に関する調査、研究内容についてご紹介させていただければと思います。

本日は、主にこのような構成で発表させていただきます。まず、東京大学としてのアグリイノベーション事業への関わり方についてですが、東京大学では基本的に、玉山地域への理解を深め農業経済学の視点から課題を発掘することに重きを置いています。ですので、何か一つの経営体に関わりまして、そこで事業の運営等を支援するといったスタンスは取っておりません。これまでに、約10名弱の学生が参加しておりますが、基本的には一人一人が、別々のテーマで課題解決に努めています。既に3年目になるわけですが、主に自分



磯道駿介さん



が今回ご紹介させていただく玉山地域の景観ですとか、日本型直接支払、新規就農、直売所の機能などのテーマで調査が行われてきています。自分は今、去年、今年と日本型直接支払のうちの中山間の直接支払に取り組んでいるんですが、こちらはまだ研究が終わっていないってところと、あと、今日は玉山の景色を見てもらいたいなってというのがあったので、そちらのテーマをご報告させていただきます。

こちらは、2年前の初年度に取り組んだ研究となっております。調査の内容としましては、玉山地域の住民の方々が、玉山らしさという観点から、玉山地域の景観に与える評価を把握して、玉山地域の景観として住民にどのような要素が支持されているのかというのを明らかにすることを目的として調査を行いました。これを通じて玉山地域への、自分だけではなくそれを発表することで、住民の方や地域外の皆さんへ玉山地域への理解を深めていただいて、さらなる地域振興へ貢献していければといった期待を込めて、研究を行いました。

調査の方法ですが、基本的にはアンケート調査を設置型で実施しまして、約100名程度に回答をしていただきました。こちらが調査に用いた写真16枚のご紹介となりますが、主に総合事務所のほうから提供いただいたものが多く、玉山地域の有名な観光スポットですとか、もしくは地域でよく見られるような農業の景観ですとか、そういったものを多く含んでおります。

では、ここから主に調査の結果について、ご紹介できればなと思っております。まず、調査の結果、こちらの啄木の歌碑と姫神山が見える眺望の景観が、非常に玉山らしいと、住民の性別や年齢、居住地などを問わず評価されていたことが挙げられます。次に、啄木関連施設として啄木記念館、玉山地域内にあります旧齊藤家ですとか、旧洪民小学校の景観は、女性や65歳未満の回答者の方々に、玉山らしいというふうに評価をいただきました。こちらの川崎緑地から見える眺望景観ですが、こちらは反対に男性の方や、すいません、これ65歳未満とありますが、65歳以上です。早速ミスが出ましたが、玉山らしいと評価されて

目次

- はじめに
- 調査の内容
- 調査の方法
- 調査の結果
- おわりに



はじめに

東京大学としてのスタンス
 ・玉山地域への理解を深め、
 農業経済学の視点から
 課題を発掘

これまでの研究内容の一例

- 玉山地域の景観
- 日本型直接支払
- 新規就農
- 直売所の機能



調査の内容

- 玉山地域在住者が、「玉山らしさ」という観点から玉山地域の景観に与える評価を把握、
- 玉山地域の景観として住民に支持されている要素を明らかにすることを目的とする。

これにより、玉山地域への理解を深め、
 更なる地域の振興へ貢献する



調査の方法

- アンケート調査
- 調査票200部を玉山地域内の施設に設置
 - 目的：16枚の景観写真を順位付け
 - 回答数：有効回答99名
 - 分析：ベスト・ワースト・スケーリング法

調査に用いた景観写真

写真1  水田と岩手山	写真2  岩手山	写真3  岩洞湖旅行村	写真4  岩洞湖全景
写真5  旧齋藤家	写真6  旧浪民小学校	写真7  歌碑と姫神山	写真8  牛の放牧

資料：写真1,2,5,6は玉山総合事務所より、写真3,7,8は岩手県観光協会「いわての旅」より、写真4は岩手県HPより、

調査に用いた景観写真

写真9  地域外からの岩手山	写真10  田んぼ	写真11  住宅と農地の眺望	写真12  住宅街
写真13  浪民駅	写真14  川崎緑地の眺望	写真15  河川と姫神山	写真16  畑

資料：写真10-14,16は玉山総合事務所より、写真9は岩手県観光協会「いわての旅」より、写真15は盛岡観光コンベンション協会より、

結果

性別や年齢、
居住地を問わず、
住民から最も
「玉山らしい」
との評価



7

結果

女性や65歳未満の回答者では
旧浪民小や旧齋藤家を高く評価する傾向に

 旧齋藤家	 旧浪民小学校
---	--

8

いました。また今回、跡見学園さんのほうで短角牛の話題をやってらっしゃるといったことでしたので、こちらで紹介させていただきます。牛の放牧の景観に関しましては、農家の方々や玉山地域内の出身者の方々が、玉山らしいと評価していました。あと5分しかないなので、こちら辺で切り上げさせていただきますが、玉山地域の固有の景観である姫神山や岩手山、また石川啄木に関連した歌碑や施設などが農村景観と融合していることが、玉山地域の方々には玉山らしいというふうに評価されるということが今回明らかになり、このような価値観は住民の間で共有されているということが明らかになりました。

結びにはなりますが、1例として、石川啄木の歌碑巡りを初め、玉山地域の景観を体験し歴史、文化への理解を深めることで、玉山地域への関心が育成できるのではないかと考えております。東京大学としましては、基本的には課題の発掘といったところで留まってしまうますが、ここから何か実際に活動等、行動に移していければなとい

結果

男性や65歳未満が
「玉山らしい」と評価

農家や玉山地域出身者が
「玉山らしい」と評価

 川崎緑地の眺望	 牛の放牧
---	---

9

おわりに

玉山地域固有の景観
・姫神山
・岩手山
・石川啄木（歌碑や関連施設）
と農業・農村景観の融合が「玉山らしさ」
→住民はこの価値観を共有



10

うのが、ちょっとした期待というか理想になっております。これで東京大学の、磯道のほうからの発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

川副 磯道さん、どうもありがとうございました。続きまして、跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科篠崎ゼミの和田乃英加さんと岡野弥生さんにご発表いただきます。よろしく願いいたします。

和田 続いて、跡見学園女子大学の発表に移らせていただきます。発表は4年の和田乃英加と。

岡野 岡野弥生です。よろしく願いいたします。

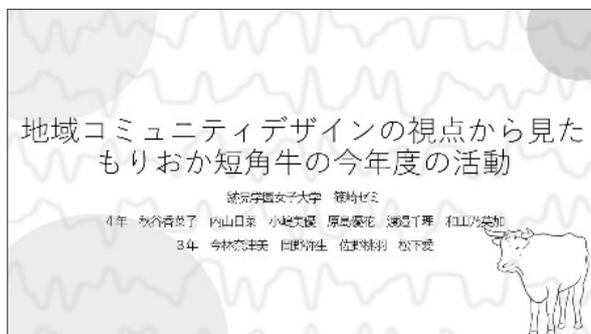
和田 跡見学園女子大学のテーマといたしましては、地域コミュニティデザインの視点から見た、もりおか短角牛の現状と振興策の検討と設定させていただきました。まず、もりおか短角牛について、説明したいと思います。短角牛とは、旧南部藩領時代に農耕・運搬用の牛として活躍していた南部牛と、海外の品種であるショートホーン種を掛け合わせた牛となっております。比較的寒い地域の自然豊かな土地で、伸び伸びとした環境で育っている牛でございます。皆さまは、和牛が4種類あるということをご存じでしたでしょうか。和牛は黒毛和種、褐毛和種、日本短角種、無角和種と4種類あるのですが、この生産されている牛のうち9割が黒毛和種となっております、日本短角種は全体の1パーセントにも満たない、希少品種となっております。

岩手県は、この日本短角種全体のうち5割程を生産しております、岩手の地域ですと二戸、久慈、岩泉、盛岡が主な生産地として知られています。中でも、もりおか短角牛といわれる牛は、盛岡生まれ盛岡育ちであること、与えられた飼料が明らかであるなど、八つの定められた基準をクリアした牛であると定められています。もりおか短角牛を語る上で、ぜひ知っていただきたいワードがこちらの三つとなっております。一つ目に、もりおか短角牛は、夏山冬里方式という方法で育てられております。5月頃、牛舎から姫神実験牧場という広い牧野に、牛たちは親子で放牧されて、自然に生えている牧草を食べて育ちます。二つ目に、赤身肉についてです。牧野で牛たちはたくさん運動しており、ストレスフリーな環境であるために脂肪が体に付きにくい牛となっております。加えて、牧草を食べているのでサシ、脂が肉に入らないすごくきれいな赤いお肉となっていて、脂がきつくなってきたなというお年寄りの方とか、あっさり肉を食べたい方におすすめなヘルシーな牛となっております。最後に、もりおか短角牛は親子愛がとて強くて、性格は人懐こく、優しい性格となっております。母牛は子牛の面倒をよく見ているので、牛は愛情たっぷり、農家さんからの愛情もたっぷり受けて育っています。

続いて、テーマですけれども、まずコミュニティデザイン学科というのは、まちづくりや地域活性を、



和田乃英加さん



人と人のつながりを重視して課題解決に取り組むことで学んでいく学科となっております。盛岡市役所の方々には、たくさんのヒアリングの機会を設定していただき、短角牛の関係者様と私たち学生を様々な場面でつないでくださいました。大変、感謝しております。私たちはSWOT分析を用いて、1年目からヒアリングの活動などをしておりまして、令和4年の3月に現地調査に行きヒアリングアンケートなどを行い、令和4年度から検討した振興策に基づいて実施してまいりました。

さらっと、ヒアリングの結果をこちらに映させていただきます。先ほどの愛情などについてです。こちらは、飼育農家さんへのヒアリングの結果です。行政からの支援が不可欠などの課題が重視されています。食肉卸業者さんのヒアリングです。安定して供給し続けることが難しいことが課題となっています。続いて、皮革事業者さんにもヒアリングさせていただきました。もりおか短角牛は健康な牛であるため、皮がとても丈夫で皮まで利用できる牛となっております。こちらが岩手県農林水産部流通課の方へのヒアリングです。最後に、飲食店の方々へのヒアリングです。

私たちはヒアリングを通して、ストーリー性、歴史・伝統・文化、愛情、この三つの点に注目してアピールしていこうという結論に至りました。その中で、令和4年度はモニターツアーとアンテナショップでのPR活動を行いました。モニターツアーは、「外部へ魅力を発信する場をつくり、実際に触れることで地域の魅力であることを盛岡市民の方々に、まず認知してもらおう」という目的の下、実施いたしました。ツアーの内容は、まず12時頃盛岡駅に参加者の方は集合していただき、バスに乗って一緒に牧野へ行き、フォトコンテストや総数当てクイズなどの企画を用意しましたので、こちらに参加していただきました。続いて、ユートランド姫神様に移動して、盛岡北生活研究グループ様と一緒に料理体験を行い、短角牛を使った料理や玉山の名産を使った料理を行いました。最後に、その作った料理をいただきながらバーベキューをして、フォトコンテストの結果の発表などをしながら、交流を行いました。

続いて、岩手県のアンテナショップ「いわて銀河プラザ」で行ったPR活動についてです。首都圏の消費者へ向けて、もりおか短角牛の魅力発信を行い、もりおか短角牛の購買につなげるという活動を行いました。さまざまな企画を用意しましたが、こちらがその企画の意図と目的となっております。こちらの牛のパネルは、等身大パネルとなっております、実際と同じ大きさの、牛のパネルを用意して親近感を湧かせようしたり、加えて親しみやすさとイベント感の創出も行いました。あちらのテレビ画面でツアーの様子を流したり、市役所の方と実際にお話しした様子を、トークショーの形にして映し出しました。

2年間の活動を通じて、地域の魅力を残していくというのは、たくさんの前向きな意見があるとともに、消費者には伝わらない課題もあることを、今回の調査で知りました。このプロジェクトを通じて、まだまだ消費者に伝え切れていない魅力が、もりおか短角牛にあると感じました。その魅力を知れば、消費者はもりおか短角牛のファンになり、応援し続けたいくなる名産となるだろうと感じました。それを伝えて消費につなげることが、玉山地域や盛岡市への貢献になると私は考えております。続いて、岡野さんに移ります。

岡野 では、私の発表を始めさせていただきます。昨年度の4年生の活動に続いて、今年度は、私たち3年生が企画を行っていきます。私からは、今年度の活動について説明させていただきます。今年度の実施企画は三つ予定しています。牧野を見学するモニターツアー、もりおか短角牛を提供しているレストランでのフェア、大学祭でのもりおか短角牛を使用した商品の販売です。時期としては、モニターツアーとレストランでのフェアが4月に、大学祭が10月にございます。こちらは、企画



岡野弥生さん

段階のため変更することがございますので、あらかじめご了承ください。

まず、牧野を見学するモニターツアーの詳細を説明します。こちらは昨年度、行ったモニターツアーを改善して行います。昨年度からの改善として、継続可能なツアーを考えたときに、ツアー料金等の面で課題が多いことが判明しました。そのことから、経済性を見越したモニターツアーを実施いたします。そのために対象者の変更として、昨年度は小学生やその親、大学生が対象者となっていました。比較的、経済的にゆとりのある世代に対象者を変更いたします。

盛岡市にあるヌッフ・デュ・パプ様にご協力いただいて、ヌッフ・デュ・パプ様をごひいきにしておられるお客さま、短角牛をよくご注文されるお客さま、今後もりおか短角牛を食していただきたいお客さまに声を掛けていただきます。企画内容としては牧野の見学、農家さんとの交流、ヌッフ・デュ・パプ様にてもりおか短角牛を使用した料理の提供を行います。参加料金を食事代プラスアルファとし、課題である経済的な面への対策とします。二つ目の、もりおか短角牛を提供しているレストランでのフェアになります。盛岡市にある、菜園マイクロブルワリー様にご協力いただいて、もりおか短角牛をお客さまに紹介する機会となります。企画内容としては、フェアでの新たなメニューの提案、ご来店されたお客さまにお時間をいただき、もりおか短角牛の宣伝PR、そこからアンケートの実施をします。実施期間は、約1週間程度で考えています。

三つ目は、大学祭にてもりおか短角牛を使用した商品の販売になります。大学祭での出店理由として、知ってもらえる機会、食べることができる機会が設けられます。大学祭に集まる人は、在校生や卒業生、受験を考えた高校生が多いと思いますが、それ以外にも幅広い世代が来場されると考えています。その中でも、赤身肉なためにあっさりとしているヘルシー志向な人をターゲットにしたいと思っています。ここでは、HoHoEMi様とのコラボを考えています。HoHoEMi様について説明させていただきます。HoHoEMi様は、他のゼミとコラボしている社会福祉法人邑元会しびらき

今年度の実施企画

- ・牧野を見学するモニターツアー
- ・もりおか短角牛を提供しているレストランでのフェア
- ・大学祭でのもりおか短角牛を使用した商品の販売

9月

10月

モニターツアー

レストランでのフェア

大学祭での販売



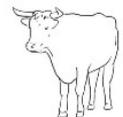
牧野を見学するモニターツアー

昨年度からの改善
継続可能なツアーを考える
その為には**ツアー料金等**の面で課題が多いことが判明した
→経済性を見越したモニターツアーを実施



対象者の変更
昨年度は小学生やその親、大学生

参加者を比較的経済的にゆとりのある世代とする



牧野を見学するモニターツアー

盛岡市にあるNeuf de Pape様にご協力いただく
・Neuf de Pape様をご贖居しておられるお客様
・短角牛をよくご注文されるお客様
・今後もりおか短角牛を食していただきたいお客様

企画内容

- ・牧野見学
 - ・農家さんとの交流
 - ・Neuf du Pape様にてもりおか短角牛を使用した料理の提供
- 参加料金：食事代 + α

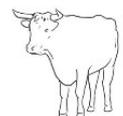


もりおか短角牛を提供している レストランでのフェア

盛岡市にある菜園マイクロブルワリー様にご協力いただく
・もりおか短角牛をお客様に紹介する機会

企画内容

- ・フェアでの新たなメニューの提案
 - ・ご来店されたお客様にお時間をいただき
もりおか短角牛の宣伝PR
 - ・アンケートの実施
- 実施期間は約1週間



大学祭にてもりおか短角牛を使用した 商品の販売

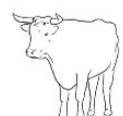
出店理由

- ・知ってもらえる機会
- ・食べることができる機会

大学祭に集まる人

- ・在学生や卒業生、受験を考えた高校生、
- ・幅広い世代

赤身肉なためあっさりとしている
ヘルシー思考な人をターゲット



の、事業の一つであるパン屋さんで、弊学の新座キャンパスにてパン販売を定期的に行っています。こちらは、農福連携の期待ができると考えています。この企画内容としては、食べ歩きができるメニューの提案と、価値と価格を考慮した限定数の販売、アンケートの実施を考えています。最終目標としては毎年、大学祭にて定番化して知ってもらう機会、食べてもらえる機会になればいいと考えています。以上が今年度、実施予定の企画、三つになります。ご清聴ありがとうございました。

川副 和田さん、岡野さん、ありがとうございました。続きまして、拓殖大学工学部前山研究室の土屋祐太さんにお話をいただきます。よろしくお願いたします。

土屋 拓殖大学工学部前山研究室の土屋が、これから発表します。前山研究室では、昨年度に引き続き、雁喰豆の生産支援をするシステム開発を行っています。まず昨年度の活動内容についてです。昨年度は雁喰豆の生産支援を目的として、農場の環境を計測するシステムのプロトタイプを作成しました。その作成したものを、現地の農家さんにデモを披露し、計測内容をホームページ上で確認できるようにしました。次に、システムの完成形のイメージを考えました。2021年度から玉山

大学祭にてもりおか短角牛を使用した商品の販売

企画内容

- 食べ歩きができるメニューの提案
- 価値と価格を考慮した限定数の販売
- アンケートの実施

最終目標

毎年大学祭にて定番化する
→ 知ってもらい食べてもらえる機会となる



大学祭にてもりおか短角牛を使用した商品の販売

HoHoEMi 様とのコラボ

HoHoEMi 様とは

- 他のゼミとコラボしている社会福祉法人元会しびらきの事業のひとつであるパン屋さん
- 弊学にてパン販売を定期的に行っている

農福連携の期待




土屋祐太さん

2030 NEW ORANGE

工学部 前山研究室

発表者：土屋祐太

2030 NEW ORANGE

2022年度の活動

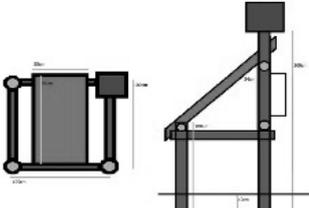
- 雁喰豆の生産支援を目的として、農場の環境を計測するシステムのプロトタイプを作成
- 実際に現地デモを実施し、HP上で計測データを閲覧



2030 NEW ORANGE

システムの完成形イメージ

- 2021年度、玉山事務所に設置した計測システムを参考にシステム全体を見直した



2030 NEW ORANGE

計測データの転送方法

- 消費電力と部品点数削減のためRaspberry Piにルーターとサーバーの2つの機能を持たせることとする
- 新たに通信モジュールを導入する
- サーバーとルータープログラムの修正が必要となる




事務所に設置している計測システムを参考に、システム全体を見直しました。また昨年度、農家さんにデモを披露したときにヒアリングを行い、追加してほしいと要望されたCO2を測定できるセンサーと気圧を測定できるセンサーの2種類を追加しました。半導体の入手困難の状況により昨年度、選定したものから入手可能品に仕様変更をしました。それに伴い回路基盤の再設計およびプログラムを、再構築をしている最中です。

計測データの転送方法を変更しました。消費電力と部品点数の削減のために、ラズベリーパイと呼ばれる小さなコンピューターにルーターとサーバーの、二つの機能を持たせることにしました。また、新たに通信モジュールを導入します。それによって、サーバーとルーターのプログラムの修正が必要となりました。センサーとサーバー間の通信をWi-Fi接続することによって、安定した通信ができると考えています。以上で発表を終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。

川副 土屋さん、ありがとうございました。続きまして、拓殖大学商学部田嶋ゼミの佐久間優衣さんにご発表いただきます。よろしく願いいたします。

佐久間 拓殖大学商学部田嶋ゼミナールの佐久間優衣です。よろしく願いします。私たち田嶋ゼミナールは、雁喰豆、煮豆の新パッケージにより、新規顧客の拡大に寄与し盛岡市玉山区の目玉商品とすることを目的として、活動に取り組みます。過去の活動実績をお伝えします。2022年度の活動として、10月と11月に意見交換会を行いました。また、12月には盛岡に訪問し、進捗状況の報告や雁喰豆の特徴についてインタビューしました。そのインタビューから、雁喰豆はかつて、丹波の黒豆に比肩する存在であったこと、また煮たときに、しわになりにくいためフォルムが美しいこと。品種改良されていない在来種であるため、豆本来の味がすること、煮豆のたれは継ぎ足して作られている伝統の味という、四つの特長があることが分かりました。

そして、雁喰豆の課題を四つ考えました。一つ目が、年末年始に利用が拡大していること。二つ目が、パッケージからは用途が分かりづらいということ、三つ目が生産段階、加工段階でのコスト削減の余地は限られているということ。四つ目が、雁喰豆という名前を知っている人は、盛岡でも

今年度の活動

- 気温、湿度、CO2を測定するセンサを追加
- 気圧を測定するセンサを追加

マイコンの交換

- 半導体は入手困難
- 昨年度選定品から入手可能品に仕様変更
- 仕様変更に伴い回路基盤の再設計中
- プログラムの再構築中



佐久間優衣さん

拓殖大学
Takushu University

商学部 田嶋ゼミ

発表者：佐久間優衣
 メンバー：太田瑛士 岡俊一郎 小笠原風太 奥山滙翔 佐久間優衣
 澤村仁 三羽奈緒子 鈴木はる菜 中黒寛紀 兵頭真樹
 森下集之介 八木綾菜 山崎楓 吉次通香 渡邊陽南

Copyright Takushu University
1

少ないということです。これらの課題を踏まえて、雁喰豆としての認知度を向上させること、現行商品とのすみ分けを行うこと、ファミリーマートでの販売を想定していますが、将来的には販路の拡大を目指すこと、現行のものと同様に真空パックにシールを貼る形でパッケージの変更を行うこと。ポップ掲示の協力要請もきていて、行うことを基本方針として活動を進めていきます。

具体的な案として、年末年始に使用が集中している、パッケージから用途が分かりづらいという課題から、ポップ広告とQRコードでアレンジレシピの提案を行います。ポップ広告では、トッピングに使用するなどの簡単なレシピを提案します。そして、レシピに起用されている商品とクロスマーチャンドライジングをすることによって、コンビニ側にもメリットが生まれます。次にQRコードでは、本格的なアレンジレシピを提案します。スライドにある写真は、サイトをイメージして作成したものです。パッケージのQRコードからアレンジレシピを掲載しているサイトを閲覧してもらうことで、新用途提案をします。このように、ポッ



活動の目的

雁喰豆煮豆の新パッケージにより新規顧客の拡大に寄与する。
さらに、盛岡市玉山地区の目玉商品とすること。



2



2022年度活動報告～意見交換会～

10月13日 拓殖大学八王子国際キャンパスにて、工学部研究室との意見交換・雁喰豆栽培状況の視察






11月8日 Zoomにて盛岡市玉山総合事務所・産業振興課の皆様、新しいわて農業協同組合・東部営農経済センター様への進捗状況の報告・意見交換

3



2022年度活動報告～盛岡訪問～

12月14日
新岩手農業協同組合・東部営農経済センターにて進捗状況の報告・意見交換



12月15日
雁喰豆を使ったお菓子を製造・販売する菓子店2店に、雁喰豆の特長についてインタビュー



4



2022年度活動報告～雁喰豆の特長～

- ✓ かつては「丹波の黒豆」に比肩する存在。
- ✓ 煮た時にしわになりにくい（フォルムが美しい）。
- ✓ 品種改良されてない在来種であるため豆本来の味がする。
- ✓ 煮豆のたれは、糺ぎ足して作られている伝統の味。

5



2022年度活動報告～雁喰豆の課題～

- ①年末年始に需要が集中
⇒ **需要の平準化、新規需要創出の必要性**
- ②パッケージからは用途がわかりづらい
⇒ **用途提案の必要性**
- ③生産段階・加工段階でのコスト削減の余地は限られている
⇒ **高付加価値化の必要性**
- ④雁喰豆という名前を知っている人は盛岡でも少ない
⇒ **まずは現地の人をターゲットに**
⇒ **名前を印象付ける工夫の必要性**



6



2022年度活動報告～基本方針～

- ✓ 「黒平豆」ではなく、「雁喰豆」としての認知度向上。
- ✓ 現行商品との棲み分け・共食いの回避。
- ✓ ファミリーマートでの販売を想定するが、将来的には販路の拡大（駅のお土産ショップのレジ横など）を想定。
- ✓ コストをかけることができない。
現行のものと同様に真空パックにシールを貼る形でパッケージの変更を行う。
- ✓ ファミリーマートには直送であるため、POP掲示の協力要請も併せて行う

7

様の意見交換や、雁喰豆の栄養素に関する大豆専門家へのインタビュー、雁喰豆、煮豆の販売店視察を行います。そこでしっかりと客層ですとか、地域の特徴など、いろんなことをインタビューしていきたいと考えています。また、新パッケージの試作品の作成やマーケティング戦略の策定や、可能ならば新パッケージでの販売をしたいというふうに考えています。以上で終わります。ご清聴ありがとうございました。



川副 佐久間さん、ありがとうございました。それ

では、パネリストの皆さまは舞台にお上がりいただけますでしょうか。その後、パネリストをご紹介してパネルディスカッションに移りたいと思います。こちらから、早稲田大学社会科学総合学院教授の早田幸様です。続きまして、盛岡市政策統括特別参与の熊谷俊彦さんです。そして今ちょうど、ご報告をしてくださった学生の皆さんです。1人目が、手前から拓殖大学の商学部田嶋ゼミの佐久間優衣さん、4年生です。続いて、拓殖大学工学部前山研究室4年生の土屋祐太さんです。続いて、跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科、篠崎ゼミ3年生の岡野弥生さんです。同じく、篠崎ゼミ4年生の和田乃英加さんです。そして、東京大学大学院修士1年の磯道駿介さんです。どうぞ、よろしく願いいたします。そしてコーディネートは引き続き、私、川副が務めさせていただきます。

ただ今、学生の皆さんから、これまでの活動についてご紹介をいただきました。そのことに関して早田さん、それから熊谷さんから、コメントあるいはお聞きになりたいことがありましたらご質問いただければと思います。

早田 学生の皆さん、素晴らしい発表ありがとうございました。それぞれIoTから、それからマーケティングの戦略までバラエティーがありましたけれども、どれも非常に突っ込んだ、かなり進んでいる具体的な成果が現れている。景観の研究にしても、これをすぐにパンフレットなどに生かせそうですし、地域のアイデンティティーの形成にもなるでしょうし、うまく産官学連携というのが回り始めているなというのを、非常に感じたところでもあります。また後で、もう少し伺えればと思います。ありがとうございました。

熊谷 まずは本当に発表ありがとうございました。ご苦労さまでした。毎回、こういった発表会のときに私も立ち会えますけれども、自分が学生だった頃、ここまで対応できたのかなというふうに思いますと、皆さん本当に頑張っていたなと思います。それぞれ専門性を生かしながら、また学生の目線あるいは首都圏の目線、外部から見た目線ということで、さまざまな課題に対して取り組んでいただいているなということで、お聞きしておりました。雁喰豆、これもパッケージ化するだとか、あるいは生産性を上げるために土壌センサーを使うとか、さらには選別機ですか、そういったものも取り組んでもらってございまして、これが量産になれば非常に大きな武器になるのかなというふうに思っております。

それから、跡見学園様には短角牛、本当に子牛をかわいがるといって、あの辺の感覚が素晴らしいなと思ってお聞きしておりました。本当にありがとうございます。希少なんですけど、なかなか商品化しにくいと、この辺あたりをさらに今後、研究していただければと思います。それから磯道さん、今回は景観ということで、東京大学さんの場合はこれが課題ですというところで、提示しているということで。ある意味、これも行政に対しての問題提起というふうに、私はいつも受け止めております。今回は触れなかったんですけど、去年やった直接支払制度、あれも非常に膨大なデータを使いながら、頑張っていたので、今年度さらにいい、大きな成果というか課題を挙げてもらうことを本当に期待しております。よろしく願いいたします。

川副 先ほど、早田先生のお話にもありましたけれども、地域の側と、それから学生の側と、いくつか視

点があるというお話があったかと思います。学生の皆さんには、学生としてこの活動に通じてどんなことを感じて考えたのかというところをお聞きしてみたいと思います。5人の学生さんいらっしゃいますけれども、それぞれ関わり方が違うと思うんです。もちろん、やって取り組んでいる活動の内容も違いますし、また関わり始めた時期も、それぞれ学年によって違うというところがあるかと思います。まず、長く関わっていらっしゃる磯道さんと和田さんにお聞きします。お二人はこれまで、どれくらい盛岡市に通われているんでしょうか。大体、何回くらい、そして1回、行くどれくらい滞在するのかなというところを教えてください。

磯道 自分はこれまで、アグリノベーション事業、始まった初年度から携わらせていただいております、現在およそ7、8回、盛岡市のほうには通ってまして、1回当たり2泊3日程度、滞在している形になっております。

和田 私は、初年度の令和3年度から関わらせていただいて、初年度はコロナでほとんど盛岡市には行けなかったんですけど、初めて行った初年度の3月から数えて計5回、行きました。9月で6回目に行かせていただくことになっております。

川副 長く関わられて、これまで7回、8回、6回という回数で現地に通われているということですが、この活動を通じて、お二人がこれまでご自身でどんな変化があったか、どのような成長を感じたか、お聞かせいただきたいと思います。

磯道 自分としては、東京大学ですので、どちらかというところと研究とか学術的な視点で物事を見る人が多いので、座学で基本、授業を受けたりするわけなんですけれども。この玉山地域という農業、農村の実際の現場に行く機会をいただけたことは、東京で椅子に座って講義を受けているだけじゃ学べない農業、農村の実態ということを知ることができて、ある意味、自分の価値観とかが一新された、非常に貴重な機会だったなと思っております。

和田 私は地元が海のそばで、漁業については小学生のときから学ばせていただくことがあったんですけど、農業については全くといっていいほど触れてこなくて。この盛岡に実際に足を運んで、生産者の方の姿を見たことで、真に食に関するありがたさを学んだし、もっと日本全体というか、規模が大きいことになってしまっているんですけど、もっと全員が生産者の方に感謝する機会をつくることのできるんじゃないかなと感じました。その真のありがたさを知れたことが、自分の中で成長かなと思います。

川副 逆に、佐久間さん、土屋さん、岡野さんは、今年度から本格的に関わられています。どのようにこの活動に関わりたいか、この活動への期待などあれば、お聞かせいただけますか。

佐久間 私は、今まで授業とかゼミナールを通じて、知識を蓄えたり学ぶ機会っていうのはたくさんあったんですけど、その学んだことを今まで外部に提案したりですとか、それを生かす機会というのがあまりなかったんで、この機会を通じて自分たちの今まで学んできたことをたくさん生かして、またそれが最終的に、玉山地区の地域の活性化ですとか、先ほどもおっしゃっていたように人手不足の解消ですとか、そういう問題に解決できるように、貢献したいなというふうに考えています。

土屋 自分としては、このアグリノベーション事業を通して、農業の知識や生産支援システムの開発に必要な技術や知識を身に付けて、似たようなことに生かせる経験を積めることが期待しています。

岡野 私は、今まで消費者としての立場だったところから、実際に生産者さんの農家さんに話せるということがすごく大きいなと思っています。私たちがやっていく今年度の企画も、できる限り農家さんに寄り添えるようなものができたらいいなと考えています。

川副 それぞれ、期待を語っていただきましたが、これから何か具体的にチャレンジしたいことはありますか。もしあれば、追加でお話しいただけますか。

佐久間 学生の間にまた、このプロジェクトみたいな活動をするっていうことは、今のところ予定はないんですけど、また社会人になったときに、こういう社会問題ですとか企業の問題に直面して、それに対し

てなんかやっていこうということはあると思うので、そういうときに、この盛岡でのプロジェクトを通じて学んだことを生かして、社会問題ですとか企業が抱えている問題っていうものに、自分がどんどん意見を提案して行って、解決に貢献できるようにチャレンジしたいと思います。

土屋 自分は、まずポスターにも掲載しているのですが、生産システムをちゃんと本実装して、その改善点の洗い出しでそれを改良していくというサイクルを、チャレンジっていうかそこでの経験を得たいと思っています。

岡野 今回は盛岡市の農家さんと関わることができたんですけど、実際に今、生活していて他にも農家さんに関われる機会、スーパーとかに行って農家さんの顔とか描いているのを見て、実際にもっと自分が身の回りのことにも、どんどん農家さんの、生産者さんの立場のことについて、知れていたらなと思っています。

川副 皆さんがいろいろと将来のことも考えながら活動への具体的な関わり方を考えていらっしゃることが分かりました。先ほど和田さんと磯道さんに、これまでの経験や活動を通じて成長したと感じる部分をお話しいただいたんですけども、この活動で盛岡市玉山地域という具体的な地域に関わりを持ち、いろんな現場の方々にお会いになったことで、自分の中で具体的にどのような部分が変わったと感じますか。

和田 私はこの大学に入る前から、地域に貢献できるような職業に就きたいと考えておまして、そんな中でこのプロジェクトに関わらせていただいたんですけども。学生という目線と、あと一消費者であるという目線と、それから生産者や販売する方々の目線を知れたことと、それを支援する市役所の方々、行政側の目線と全て完璧に知れたわけではないんですけども、全て一通り感じる事ができたと思っています。この目線を忘れずに、地域の人を支えられる人になりたいと、今後、この目線を活用して、地域に貢献できる職業に就きたいと感じるようになりました。

磯道 自分は先ほども述べましたが、現場を知ることができたというのが貴重な経験であり、現場の課題を解決したいという思いが一層、強まったところでもあります。自分は、今後も学問または研究の分野に進んでいこうと考えていますので、今回、第一歩として盛岡市玉山地域に関わらせていただいたことは、今後の人生を歩んでいく中で、大きな貴重な経験になったのではないかなと思っています。

川副 お二人とも、もともとは玉山地域と何か関わりがあったわけではないと思うのですが、通っていく中でだんだん地域に詳しくなり、知り合いが増えていくという経験をされました。和田さんは、それをきっかけに将来や進路を考えるなかで、別の活動にも展開されていると伺いましたけれども、その辺りいかがでしょうか。

和田 地域に貢献していきたい職業というのは、私は市役所職員になりたいなと今、思っているんですけど。盛岡の人々と関わっていく中で農家さんや飲食の方々、地域のために働いている盛岡市役所の方々のことも、すごい勉強させていただきました。盛岡の人々は、皆すごく優しくて親切な人が多いなと、通う中でずっと思っていたんですけど。その人たちの人柄を見ると、今後とも関わっていきたいなと感じるようになって、私もそのような職員になりたいなと思ったし、私がそのような職員になることによって関係人口が増えるというか、その地域に関わってくれる人々も増えるんじゃないのかなと、盛岡に関わり続けていく上で感じる事が多くなりました。

川副 皆さんからの地域貢献という言葉が出てきました。今まではご自身の経験や成長という観点でお話しいただいたんですが、逆に地域の側のことを考えたときに、皆さんがこういう活動をすることによって、地域にどんな変化を、イノベーションを起こせるのか。地域にどのような貢献ができるのか。すでに少しお話ししているところもありますけれども、それに関して皆さんからお考えを一言ずつお話しただけですでしょうか。

磯道 自分たち東京大学のほうとしましても、自分個人としましても、基本的には学術的な立場から課題

を提示するといった形で、これが直接的にイノベーションにつながるというわけではないかなとは思いますが。その課題の発掘を通じて、行政や民間等に働き掛けることによって、それがいずれイノベーションにつながるよう、その礎となるような取り組みを続けていければいいなと思っております。

和田 学生として、継続的に関わり続けていくことが重要なと思っております。農家の方々と継続して関わることによって、前まで堅い関係で

しゃべりづらかったことも、どんどん話してくれるようになって、こちらからの意見の提示もできるように、だんだんとなってきました。関係性が広がっていったり深まることによって、イノベーションの枠というか今後の可能性も広がってくると思うので、関わり続けていくという姿勢が重要なと思っております。

岡野 私は今年度からになるので、今まで和田さんたちが築き上げてきた農家さんとの関わり方とかっていうのを、今後も私たちが引き継いでいけるような今年度になりたいと考えています。

土屋 こういう場を通して自分たちの活動を知ってもらって、それによって地域の現状とか自分たちのできることを考えてもらうことが、回り回って地域貢献につながるのではないかなと自分は考えています。

佐久間 私たち田嶋ゼミナールがしたイノベーションとしては、先ほども発表の中で申し上げたように、雁喰豆を玉山地区の目玉商品にするというところで、玉山地区といえば雁喰豆だよねというイメージを、できれば作れたらいいなというところ。なので雁喰豆っていうものを通じて、より多くの人に玉山地区を認知してもらえたらいいなと思いますし、また認知してもらうことで玉山地区に、じゃあ実際に観光に行ってみようかなとか、観光に行った中でこちょっと住んでみたいなと思っていただいで、居住が増えるように頑張りたいですし、また雁喰豆を通じて、農業の問題とかも解決できたらいいなと思います。

川副 学生の目線からこの活動を通じてどんな地域貢献ができるかを語っていただきました。では逆に、地域側から熊谷さんにお話しいただきたいと思います。こういった活動や事業は、玉山地域あるいは盛岡市などの地域社会にどのような影響や効果をもたらしているのでしょうか。その点につきまして今どのようにお考えでしょうか。

熊谷 いろんなテーマで活動してもらっていて、例えば雁喰豆にしろ短角牛にしろ、いろいろ今後、提案がなされてきて現場での活動というのも変わってくるかと思いますが、私が一番、着目しているのは、先ほど磯道さんから座学だった自分にとって、現場の実態を理解して価値観が一新したという発言がありましたし、和田さんも生産者と関わって、もっと全員が生産者に関わっていければというそういうお話、地域貢献したいというお話もありました。学生さんの目線からすれば全くありがたいお話でして、逆に、地域にとっても全く同じようなことが、つまり言い方が悪いんですけども、中山間地域で条件不利な所に、東京の若い学生さんたちが足を運んで生産現場を見ていただいで、経験してお話を聞いてもらって、あるいはこんなことをしたらどうなんですか、ここは課題じゃないんですかと言ってもらったことによって、地域の農業生産者も自分たちの将来に対して、これ、私の推測なんですけども、大きな希望を持つことができたんじゃないのかなと。それが、次の世代をつくって農業の持続性と、そういったものにもしかして大きく貢献しているんじゃないのかなというふうに、私は思っております。

先ほどの早田先生のお話の中に、大学生と地域のレシプロカルというんですか、関係が必要なんだと、共に成長するというお話があって、全くそのとおりだなというふうに思っております。学生さんにとっても、こういった価値観が一新した、逆に地域にとっても自分たちの可能性というものを感ずることができたんだということ、そういったことができつつあるというのが、非常にいい事業だなというふうに私自身



は思っております。こういった経験ができる人を、学生あるいは地域の生産者、一人でも多くつくり出していければ、この事業ということの大きな成果かなというふうには今、思っております。以上です。

川副 ありがとうございます。早田先生、今、レシプロカルな関係というキーワードが出てまいりました。今のお話をお聞きになって、ソーシャルイノベーション的のどのような可能性があると思われますか。



早田 どうしてこれがうまくいっているのか。今日聞いていたら、玉山は地域自治区の歴史があって、今でもそこに役所のランチがあって、役所の中でも玉山は玉山で応援していこうというような流れが残っているということを伺って、なるほどな、というふうに伺いました。そういう地域の誇りを持った気持ちというのがあって、学生さんがそこに行くというキャッチボールがうまくいっている、これは素晴らしいなと思って。これをぜひ、もっと逆に息を吹き込み直すようなシナリオとかストーリーみたいなものを作って、フォーマルに応援していくという流れをぜひつくっていただけると。

よく、条件不利地域は第1防波堤、第2防波堤、第3防波堤というんですが、東京なり消費地が理解するような第1防波堤、文京区で、例えば銀河プラザでよく売れるとか。第2防波堤で盛岡市が岩手全体の中心としてしっかりやる、第3防波堤で農産村、中山間地域の一人一人の生産者が頑張るとなると思うんですが。第3だけではうまくいきませんので、第1、第2と連携して、多重防波堤を築くために、学生さんがそれぞれの箇所で大きな役割を果たせるわけですので、この枠組みをうまくストーリーにしていきたいなと思いました。以上です。

川副 熊谷さん、そういったうまい仕組みづくりについて、この事業を進めていく上で、特に気を付けてきたこととか工夫されてきたこととかありましたら、ぜひお聞かせください。

熊谷 この事業を始めたのが実は令和元年の5月から、まさしく令和とともにここまで来たということなんですけれども。今、振り返って、なんで私がスタート時点でうまくいくかどうかで半信半疑だったというのが、一つは制度がきちりとできていなかったということがあったんですけれども。逆に今から思うと、制度がきちりとできていなかったが故に、各大学とお話をして、実際に学生さんとお話をして、学生さんが玉山地域に入ることによって、われわれ盛岡市と大学と、学生と受け入れる農家、そういった方々が共同でこの仕組みというものを、時間をかけてつくってきていると。なので、ある意味、まだ成長過程にあるとは思っておりますので、その成長過程にあるこの仕組みを、先ほどの早田先生のお話にもあったように、さらに発展していかなきゃいけないし、いけるんだらうなということで、より多くの人たちの意見を聞きながら、この事業をさらにレベルの高いものにしていかなきゃいけないというふうにも今、思っているところです。以上です。

川副 追加でお聞きしますが、今後この事業をどのように展開していきたいか、あるいはどのようなことをこの事業に期待していられるのか、お考えがあればお聞かせいただけますでしょうか。

熊谷 先ほどのお話、前半にもお話ししたんですけれども、現在はアグリということで農業ということをピンポイントにしておりますけれども、地域課題というのは農業だけでももちろんないわけですので、共通の課題ということを盛り出すことができれば、その分野を広げていくということ。それから現時点で、四つの大学と共同研究しているわけなんですけれども、これをさらに広げていけばいいなというふうに思っており、今年度で3、4、5の第1クールが終わりますので、来年度、6年度からまた次の3年間をスタートしたいと思っておりますので、その中ではこの事業に参画する大学を一つでも多く増やして、皆さんのお

話があるように、生産者とお話をするによって考え方が大きく変わったという、そういう学生を一人でも多くつくってあげればいいのかというふうに思っております。以上です。

川副 もし会場のほうから、ご質問があればお受けしたいと思うんですけども、いかがでしょうか。ご意見、ご感想でも結構です。どの方に対する質問かも含めてご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。



フロア参加者A 埼玉県の上野原町から来ております、

〇〇と申します。こういう取り組みは、実は行政と大学生との取り組みというのは初めて経験しているんですけど。今、農業に関しまして若者が、後継者も含めまして、なかなかそれに関わる人が少ないということなんですけど。今回、大学生がそこに関わって当初、持っていた農業に関するイメージが、実際に農業を体験することによりましてどんなふうになったか、あるいは、今後そういう農業に関しまして、将来的な仕事につなげていける希望があるかということ、お聞きしたいと思います。

川副 ご質問、どうもありがとうございます。学生さんに対する質問ということで、じゃあ佐久間さんから、農業に対するイメージは実際に事業に関わってみて変化はあったのか。就職や仕事という観点で農業を見たとき、どのように考えますか。

佐久間 私の農業のイメージは、すごく力仕事が多いですか、先ほどもおっしゃっていたように、後継者不足というふうに、すごく大変なイメージもあるんですけども。でもその反面、農家の方々がいらっしゃることによって、私たちがおいしい野菜を食べれたり、おいしいお肉を食べれたり、そういうふうのできるので、とても私たちにとってありがたい存在なので、この問題というものをそのままに放ってはいけないので、この雁喰豆の、盛岡のプロジェクトを通じて地域貢献できたらいいなと思いますし、こういうふうに関わることについて考えて解決に向けて頑張るということは、社会人になっても何か問題に対して直面するということがたくさんあると思うので、そういう考えるプロセスとかは、このプロジェクトを得ているものがあるのではないかなというふうに考えています。

土屋 自分は、農業に対するイメージは、参入障壁が高い業種であるというのが一つと、あと高齢化が進んでいるという二つのイメージが強いです。一つ目の参入障壁が高いって問題に対する回答として、自分たちの生産支援システムが一つの回答というか、低下につながればなというふうに考えています。

岡野 私は、高校の頃に農業に興味があって、高校時代に少し農業を学んだんですけど、今の後継者不足とかいう問題も、今、農業大学とかで学んでいる人たちが新たに出てきて、新たな技術を使って農業をしていくということも、新たな一面として農業にすごい良いなと思っているので、そういう形でどんどん農業がもっと発展していったらいいなと思います。また、私は大学を決めるときに、まちづくりも興味があったので、こうやってまちづくりの学科に入ったんですけど、こういうふうに関わりながらまちづくりができているので、農業に対してこういう関わり方もできるってということが、すごくよかったなって思います。

和田 私は農業に対してとにかく大変なものとか、そういう漠然なものしかイメージは抱いていなかったんですけど、こうやって事業に関わっていくうちに知らないままだったのがもったいないことだったなと感じました。もし、もっと小さいときから農業について学校とかでたくさん教わっていれば、問題意識を持って農業に対して関わっていたら、そこがもったいなかったなと感じたので、今の子どもたちとかに農に対する普及活動がさらにできたら、良い社会になるかなと感じました。

磯道 自分の、この事業に携わる前の農業のイメージというのは、それほどあまり深く考えたことがなくて、

お店に行けば食品、野菜が売っているのはごく自然で、たとえポップがあったとしても、この人が作ったんだといってそこに食材があることをある意味、当然のものとして認識していたんですけども。例えばですけど、僕、直近で5月、6月に盛岡のほうへ行って、田んぼを見て回るみたいなことをしたんですけども、ちょうど田植えの前後の時期で、農家の方が畦畔を丁寧に、一つ一つ手で塗っているところを見たりしたんです。そうした中で、実際に農作業を丁寧にやっている姿を見て、ちょっと言い方は悪いですけど、ある意味、泥臭さを感じたんですけども、でも、それがいかに私たちが、広く言えば国民の皆さんとかに食料を提供するといった意味で多大なる貢献をしているなというのと、あと同時に、事業を通じて農家の方々にお話を聞く中で、農業が営まれていくってということは、そもそもその地域の農村とかの歴史や文化、伝統というのが次世代以降に継承されていくことにつながるんだなというのを、ある意味、身をもって体感することができたので、そういった意味で農業というのは、大げさに言いますと国を支える上で、重要な役割を担っているんだなというふうに認識が変わりました。

フロア参加者A ありがとうございます。

川副 ありがとうございます。この活動を通じて、意識や認識の変化があったという話だったかと思います。あと1問くらいお受けできるかと思いますが、いかがでしょうか。お願いします。

フロア参加者B 早田先生に伺いたいんですけども、早田先生の説明とか、それから学生さんの数々の取り組みって実に分かりやすいし、日本にとっては絶対不可欠なものだと思うんですが。ただ、いざ現実に目を向けますと、農業従事者の意識というのはなかなかそこまでいっていない。それから、岩盤みたいなものすごい規制もあって、なかなか今後の取り組みってそう容易じゃないと思うんです。先生、その辺について、いざ現実的な問題というのは山ほどあると思うんですが、どのようにお考えなってますでしょうか。

早田 私はさまざまな所でイノベーションのお手伝いをしているんですけども、今おっしゃるとおりに、ここは難しいなという山も高いのもあれば、さまざま岩盤もあると思うんですが。一つ、参考になるか分かりませんが、私が心掛けてるのは、まず学生と一緒に遊ぶということなんですが、先ほどレパトリーと言ったんですけども、いきなりカラオケで歌ってと言っても歌えないので、しばらくは一緒にデュエットの練習をして、今度はちゃんと歌えるぞというときに、じゃあマイクが回ってきたら歌えるようにするというような期間が、学生と1、2年はかかると思うんですけども。イノベーションに頭が慣れて、取り組みで書いたりとかというものに慣れてくれば、気がついたらできるようになっていたということもあるんじゃないかなと、5回に1回ぐらい、5地区に1回ぐらいは、それ出てくるんじゃないかなと思っています。

川副 ありがとうございます。まだまだ議論が尽きないところですが、パネルディスカッションの終わりの時間がきてしまいましたので、こちらでパネルディスカッションは終了とさせていただきます。メンバーが入れ替わっても、学生間で活動が



引き継がれて継続していること、その中で学生さんがそれぞれいろんな経験をして学ばれてきていることがお分かりいただけるお話だったと思います。また、早田先生のお話、それから熊谷さんのお話からは、この事業にいろいろな可能性があることを見せていただきました。

本日、午前中には、この事業に参加した、登壇している学生以外の学生が多数、集まりまして、大学や研究室を超えた交流会を行いました。その際に、この事業にどのように関わってきたのか、関わりながらどんなことを期待し成長してきたのかということ、グループで議論いたしました。そこで出された意見を付箋に書きまして、模造紙に貼って、ホール外のパネル展に展示しておりますので、そちらも併せてご覧いただき、学生たちの思いや考えにも触れていただければと思います。

それでは、こちらで終了とさせていただきます。皆さま、パネリストの皆さまに盛大な拍手をお願いいたします。

閉会あいさつ

跡見学園女子大学地域交流センター長
土居 洋平

ただ今ご紹介に預かりました、跡見学園女子大学地域交流センター長の土居と申します。主催者を代表しまして、ご挨拶をさせていただきます。

本日は、本当に多くの方に、そして様々な立場の方にお集まり頂きまして、本当にありがとうございました。本日の皆さんのお話を伺いながら、このアグリイノベーションのプロジェクトが様々な方が関わってできているということを改めて実感いたしました。様々な方が関わりながら、最初、熊谷様もおっしゃっていたように、最初からこの完成の形があるのではなくて、様々な試行錯誤を繰り返して関係者、一人一人が行ったことが、次につながっているということを実感しております。熊谷様のお話の中に私も写っていた写真がありましたけど、当時はこのような形に発展するというのは、恐らく熊谷様も私も、そうならいいなとは思っていましたが、本当にそうなるという確信はありませんでした。こうした形にするとできるかもしれないですねといったことを、持ち帰って頂いて検討頂いたら、本当にそのような方向で準備頂き、実施に至ったわけです。

ただ、その後コロナ禍がありまして、準備頂いたにもかかわらずスタートが切れませんでした。そうしたもどかしさもありながら、でもそれが一段落して、学生の皆さんが盛岡にも行けるようになり、活動頂いて地域の方と接して成果を上げて現在に至る。この一つ一つのプロセスで、それぞれの方が関わって、現在の形があるんだなと感じています。こうしたつながりの力を、私は所属の学科としてはコミュニティデザイン学科ですので、改めて感じたところです。

このシンポジウムも、このプロジェクト全体と同様、多くの方にご協力頂いて本日に至りました。共催で、拓殖大学の皆さんにも運営にも入って頂きまして、何とか実施することができました。実は、司会の川副助教なんですが、5月1日に本学に着任したばかりです。着任早々、この2か月間、本シンポジウムの担当として準備に従事してもらいました。司会とそれからコーディネート、さも昔からこのプロジェクトを知っているような形で運営してもらいましたが、実はこの2カ月の間に大変勉強して頂き、本日に至るということです。学外の皆さま、そして学内の関係者各位、そして本日この会場にお越し頂いた皆さま、その力で本日のシンポジウムの成功があると思っております。本日は、本当にどうもありがとうございました。



閉会あいさつの様子

盛岡の魅力に触れ、交流を深める ～シンポジウム関連イベントの記録～

川副早央里

1. はじめに

今回のシンポジウムは、都心の大学生が地方（地域社会）でフィールドワークを行う意義や課題を検討することを主たる目的として企画したものであり、シンポジウムにおける発表やディスカッションはまさにそのことをテーマとして行った。しかしながら、今回はそうした学術的あるいは学内的な議論に留まることなく、文京区民をはじめ来場者の方々が盛岡市の魅力に触れること、また今回取り上げた「アグリイノベーション事業」を通じて文京区・盛岡市・区内大学の学生など関係者がさらに交流を深めることも目指したいという意図があった。そこで、シンポジウム当日には、シンポジウムの関連企画として、登壇者以外の学生も交えた学生交流会、大学および各自治体の事業関係者の交流会、各大学の活動紹介を行うパネル展、学食での盛岡特別メニューの提供、盛岡さんさ踊りの披露を行った。以下ではそれらの関連企画の概要と当日の様子を紹介したい。

2. 学生交流会

今回のシンポジウムで取り上げた「文京区学生が創る盛岡アグリイノベーション事業」には、文京区内各大学から多数の学生が参加しており、シンポジウム当日は登壇する学生のみならず多数の学生が来場された。この機会を活用して、登壇しない学生たちにも集まってもらい、大学やゼミ、学年を超え、同じ事業に関わる大学生として交流を深めてもらうため、シンポジウム開催前に学生交流会を開催した。

シンポジウムに参加した本学学生、拓殖大学学生、東京大学学生が混ざった6グループに分かれてグループワークを行った。グループワークでは、自己紹介と本事業への自身の関わり方について話をしたあ



写真1 学生交流会の様子



写真2 学生交流会の様子

と、「この活動を通じて自分自身どのように成長したと思いますか？あるいは成長したいと思いますか？」「学生としてどのような地域貢献ができると思いますか。あるいはどのように貢献したいと思いますか？」という問いについてグループディスカッションを行った。各自の経験や意見、感想を付箋に書いてもらい、グループ内で議論したあとは、付箋を模造紙に貼り付け、全体で共有をするとともに、来場者の方に登壇者以外の学生の意見や感想も見ていただけるようシンポジウム会場前のパネル展での展示も行った。付箋に書かれた内容は下の通りである。交流会のあとは、グループごとに学食へと移動し、後述する盛岡特別メニューの昼食を一緒に食べてさらに交流を深めた。

事業として取り組む活動内容や盛岡市の訪問経験なども異なる学生たちであったが、今回の交流会を経て、互いに質問をしたり、意見を出し合ったり、グループディスカッションも盛り上がっていたようである。

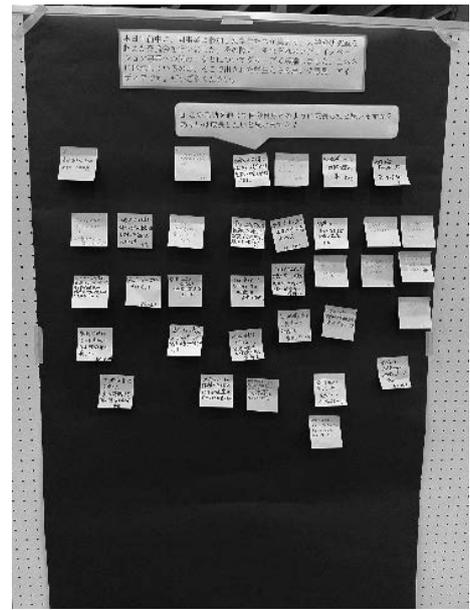


写真3 グループディスカッションで出された意見

Q. この活動を通じて自分自身どのように成長したと思いますか？あるいは成長したいと思いますか？

- ・責任ある仕事への向き合い方の成長。
- ・社会人になる前に地域に貢献できる貴重な機会を経験できる。
- ・システム開発の知識や農業生産の知識の向上。
- ・顧客の目線になって商品を考える力を身につけたい。
- ・その地域について理解を深めることができる。
- ・提案力をつける！
- ・いろんな方の協力で成り立っていることを実感。責任感をより強く持つようになった。
- ・地方の課題に対し、当事者意識を持って解決を目指す。
- ・ものごとを自分ごとのように考えることができた。
- ・貴重な実践的経験を通して、実践でも通用する能力を身に着けたい。
- ・農業・農村を知り、価値観や認識が変わった。
- ・納得してもらえるような企画の提案をしたい。
- ・企画書やメールなどにもっと慣れたい。
- ・先行研究をもとに、頭を柔らかくして考えたい
- ・しっかりとした役割分担はされていないが、そのなかでも自分から積極的に動けるような人に成長したい。
- ・盛岡・玉山地域に詳しくなった。
- ・盛岡の人たちと交流して、地域の風土を知りたい。
- ・今まで学んできたマーケティングの知識を実践で活かしたい。
- ・プレゼンスキルをもっと上げたい。
- ・プロジェクトにおける願望と現実問題のギャップを埋められるアイデアを出したい。
- ・PR方法を増やして長期戦のゴールに近づけたい。
- ・自分が知らないことを知ろうとする積極性を養いたい。
- ・生産者目線を知り、“食”へ感謝する真の意味を知った。
- ・さまざまな人と交流し、コミュニケーション能力を身につけたい。
- ・地域の課題と向き合い、発展の起点となる提案を行う。

- ・玉山地域の方々と交流して知識を増やしたい。
- ・提案力を身につけ、課題解決や目標達成を通じて成長していきたい。
- ・シンプルだけど、くじけないこと。
- ・地方ならではの課題に向き合い、寄り添った提案ができるよう成長したい。
- ・他大学の学生たちと盛岡市の話をして、地方の農業における課題を知ることができた。
- ・愛情を込めて育ててくれる農家さんに寄り添えるようになりたい。
- ・座学では知ることのない地域の想いを知った。
- ・地域の良さを自分でもよく知って、ちゃんと伝えられるようになりたい。

Q. 学生としてどのような地域貢献ができると思いますか。あるいはどのように貢献したいと思いますか？

- ・実際の声を聞き、地域固有の課題を明確にすることで解決案を出していきたい。
- ・地域課題の発掘・解決策の提示。
- ・東京という都会に住んでいる人ならではの視点で地域活性化に貢献したい。
- ・自身の学んだ学部の知識や経験を活かすかたちで貢献する。
- ・学生だから時間があり、さまざまな人の意見も考えを聞かせていただく機会が多いです。それらを活かし、いろいろな人の考えをいろいろな角度からみて、学生らしい柔軟な発送で地域に貢献がしたいです。
- ・地産地消をみんなに推進していきたい。
- ・地域の方々と積極的にコミュニケーションをとり、地域に寄り添った提案をして活性化に貢献していきたい。
- ・玉山地域をよく知って、地域活性化に貢献したい。
- ・現地の人間ではない私だからこそできる、多角的な意見を提案したい。
- ・玉山地域といえば「雁喰豆」というイメージを作り、認知度UP。
- ・豆に限らず、盛岡のものを購入していく。
- ・盛岡市や玉山地区の活性化を促したい。
- ・自分たちの活動を通じて地域の現状や自分たちでもできることを知ってもらう。
- ・短角牛を通して盛岡市の認知度も上げる！
- ・東京の人、同世代の人に盛岡市を知ってもらう機会として貢献したい。
- ・まわりまわって地域活性化を実現したい。
- ・少しでも地域を盛り上げることに携わり、発展させていきたい。
- ・ゼミや授業で学んだことを活かしながら、資源を最大限に発信し、地域貢献したい。
- ・学生パワー。元気に貢献。
- ・周囲の学生に盛岡のことをたくさん発信して、盛岡のことを知ってもらう。
- ・新しい風を呼び込む（例：学生視点の意外なアイデア）。
- ・冷麺と短角牛（焼肉）の組み合わせを広める！
- ・盛岡・玉山との関わりが周囲に増えた。
- ・盛岡の名産を一つ増やし、知名度を上げて活性化に繋げたい。
- ・地方の良さをこの活動を通して知ること、より多くの人々に地方の良さを知ってもらうきっかけをつくる。
- ・地域で起きていることや魅力を、大学内の他学部の人にも知ってもらう。他のことを専門に学んでいる人の意見をもらい活動に活かす。

3. パネル展

当日の受付を行ったシンポジウム会場のBlossom Hallの入り口では、各大学あるいは研究室が取り組む

2023年度跡見学園女子大学地域交流センターシンポジウム
「地方を盛りあげ隊!—文京区学生による盛岡アグリノベーション—」

パネル展資料

本日は、盛岡市で行う「文京区学生が創るアグリノ
ベーション事業」の活動を紹介するため、会場のプロッサ
ムホール前でパネル展示を行っています。
お手元でもご覧いただけるよう、こちらに資料をご用意
いたしました。パネル展あるいはこちらの資料をご覧にな
り、パネル展で説明を行う学生たちから直接事業の詳細を
お聞きになってください。質問、意見交換も歓迎です!



玉山のマスコットキャラクター たま姫ちゃん

解説パネル

住民が捉える玉山らしい景観

東京大学 磯道駿介

1. はじめに

地域経済フィールドワーク実習
→地域への理解を深め、課題を発掘
2021年度のテーマ
・玉山における景観評価
・中山間地域等直接支払制度
・土地改良区
・地域おこし協力隊
・新規就農者
・直売所の機能

2. 調査内容

玉山地域のシンボル
→姫神山・岩手山、石川啄木

課題

玉山地域の住民はどのような景観を
「玉山らしい」と捉えているのか

3. 調査方法

設置型のアンケート調査により
16枚の景観写真を評価
回答者：120名（うち有効回答99）
分析手法
ベスト・ワースト・スケーリング法

4. 結果

- ・写真1はあらゆる属性で最も「玉山らしい」との評価
- ・写真2は次いで高い評価
- ・写真3の旧斎藤家や写真4の旧浪民小は女性や65歳未満で高い評価
- ・写真5の川崎緑地での眺望は男性や65歳以上で高い評価
- ・写真6の牛の放牧は農家や玉山地域出身者に高い評価

5. 景観写真



写真1

写真2



写真3

写真4



写真5

写真6

資料：写真2、3、4、5は玉山総合事務所、
写真1、6は岩手県観光協会の「いわての旅」。

6. おわりに

自然景観として姫神山・岩手山、
文化的景観の石川啄木や農村風景が
融合している景観が「玉山らしい」
「玉山らしさ」を住民は共有
地域内外へのアピールに活用を

7. 参考文献

東京大学農学部農業・資源経済学専修『盛岡市玉山地
域の農業・農村と地域社会-2021年度地域経済フィー
ルドワーク実習報告書1』。

東京大学パネル

地域コミュニティデザインの見点から見た もりおか短角牛の現状と振興策の検討

跡見学園女子大学 篠崎ゼミ

4年 秋谷香菜子 内山日菜 小嶋美優 原島優花 渡邊千理 和田乃英加
3年 今林奈津美 岡野弥生 佐野桃羽 松下愛



もりおか短角牛そのものの魅力・
農家さんや関係者の方々の牛たちへの
愛情を、
玉山の歴史と絡めて盛岡市内や首都圏に発信
する活動を行ってきました。
赤身肉、粟山冬里、姫神山など
活動時の取材で得た、もりおか短角牛の
魅力をこれからも消費者に広めて
いきます!

令和4年 3月 盛岡での現地調査・ヒヤリング
8月 ツアー 現地事前 打ち合わせ
9月 モニターツアー実施
9月 文京シビックホール 中間報告
10月~12月 観河プラザ準備
令和5年 1月 いわて観河プラザ at 銀座
2月 姫神ホール 最終報告

玉山地域 短角牛農家様
姫神実験牧場 ユートランド姫神様
盛岡大通商店街の飲食店様

フィールド先

玉山の農家の 逸孫さん(右)と岩崎さん(左)



今年度の 実施企画

牧野を見学する モニターツアー

企画内容

- ・飼育環境の見学
- ・農家さんとの交流
- ・もりおか短角牛を使用した夕食
- ・感想等のヒアリング

もりおか短角牛を提供する レストランでのフェア

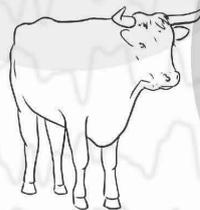
企画内容

- ・フェアでの新たなメニューの提案
- ・もりおか短角牛の宣伝PR
- ・アンケートの実施

大学祭でのもりおか短角牛を 使用した商品の販売

企画内容

- ・食べ歩きができるメニューの提案
- ・パン屋さんとのコラボ
- ・価値と価格を考慮した限定数の販売
- ・アンケートの実施

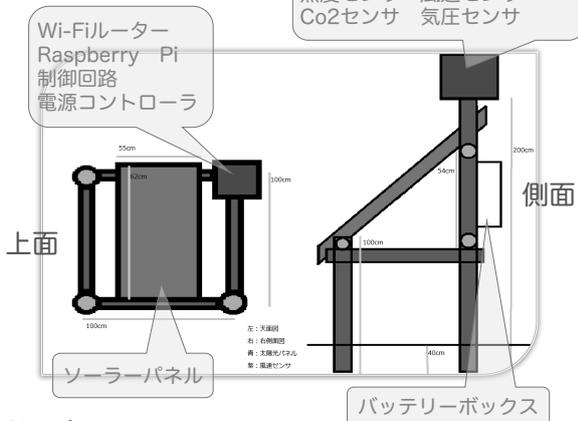


跡見学園女子大学パネル

IoT技術を活用した農業生産支援

拓殖大学 工学部 電子システム工学科
前山研究室 土屋祐太 田福永

農業用環境センサー



計測データフロー



本研究室では雁喰豆の栽培支援をするための農業用環境センサーシステムを開発しています。2022年度はプロトタイプを作成し本年度は実装モデルを製造しています。



拓殖大学商学部 田嶋ゼミナール 「消費拡大・生産振興を目的とした雁喰豆煮豆の新しいパッケージ提案」

活動の目的
雁喰豆煮豆の新しいパッケージにより新規顧客の拡大に寄与する。さらに、盛岡市玉山区の目玉商品とすること

雁喰豆 (煮豆) の特長
 ・かつては「丹波の黒豆」に比肩する存在。
 ・煮た時にしわになりにくい (フォルムが美しい)。
 ・品種改良されていない在来種であるため豆本来の味がする。
 ・煮豆のたれは、継ぎ足して作られている伝統の味。

雁喰豆 (煮豆) の課題
 ①年末年始に需要が集中
 ↳ 需要の平準化、新規需要創出の必要性
 ②パッケージからは用途がわかりづらい
 ↳ 用途提案の必要性
 ③生産段階・加工段階でのコスト削減の余地は限られている
 ↳ 高付加価値化の必要性
 ④雁喰豆という名前を知っている人は盛岡でも少ない。地産地消に焦点
 ↳ まずは現地の人をターゲットに
 ↳ 名前を印象付ける工夫の必要性

新パッケージ提案の基本方針
 ・「黒平豆」ではなく、「雁喰豆」としての認知度向上。
 ・ファミリーマートでの販売を想定するが、将来的には販路の拡大 (駅のお土産ショップのレコメンド) を想定。
 ・コストをかけることができない。現行のものと同様に真空パックにシールを貼る形でパッケージの変更を行う。
 ・ファミリーマートには直送であるため、POP掲示の協力要請も併せて行う

2021年度の活動
 ・2021年11月14日
 ↳ 新しく、農産物経済センター様への進捗状況の報告 (Zoom会議)
 雁喰豆選別工程視察
 ・2021年12月15日・16日
 ↳ 盛岡市玉山区訪問、農場、加工工場、煮豆販売店を視察
 煮豆加工工程視察

2022年度の活動
 ・2022年10月13日
 ↳ 拓殖大学八王子国際キャンパスにて、工学部研究室との意見交換・雁喰豆栽培状況の視察
 拓殖大学八王子国際キャンパス訪問
 ・2022年12月14日・15日
 ↳ 盛岡市玉山区訪問、農場、加工工場、煮豆販売店、菓子店を視察
 農産物訪問 (左) 雁喰豆を使ったお菓子を製造・販売する菓子店訪問 (右)

新パッケージ案
 ・名前の由来である雁が黒豆を啜っているイラスト
 ・盛岡名産をアピールするため「盛岡」「がんくい豆」を記載
 ・フォントを付けることで多様な陳列方法に対応
 ・POP広告で雁喰豆の伝統や歴史、アレンジレシピを告知
 ・QRコードでアレンジレシピを提案
 ・60グラムで198円 (1gあたり¥3.3)

←今後、工学部デザイン学科学生による正式なパッケージ案および試作品を提案予定

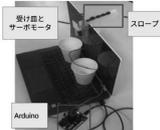
黒平豆用自動選別装置の開発

拓殖大学工学部佐々木研究室

はじめに

岩手県盛岡市玉山区の特産である黒平豆 (雁喰豆) は、平たい形で、皮が薄いことから、転がりにくく傷つきやすいという特徴があるため、機械化が難しい。そのため、選別作業が全て手作業によって行われており、非常に手間が掛かり、人件費が多く掛かっている。実際に黒平豆を選別できる機械は存在するが、導入には多額の費用が掛かり、生産者の負担がとて大きく、このような問題から栽培農家の減少を引き起こしている。

実験方法



この図のように、スロープに乗せた黒平豆をスロープにつけていくサーボモーターを振動させることで少しずつ前へ進ませ、一粒ずつ受け皿に落とし、PCにつけているカメラに黒平豆が映る。そのタイミングで、あらかじめAIに学習させていた

研究結果

開発した装置で、どの程度の精度で規格品と規格外品の選別ができるかをそれぞれ100粒で試したところ、次の表のような結果になった。

選別対象	規格品に選別された数	規格外品に選別された数
規格品	35%	65%
規格外品	4%	96%

選別速度については、豆1個あたり約6.6秒程かかっているため、24時間稼働させれば1台で約13091粒の選別ができる。さらに、この装置を複数台用いれば、より効率化を図ることができる。しかし、6人体制で、人が選別を行った場合の選別速度が1日で、250000粒なため、選別速度に関しても向上させる必要がある。

研究の目的



先ほどでも述べたように、黒平豆は平たく転がりにくいという特徴により、機械化が難しく、選別作業における手間や人件費が掛かることに起因し、栽培農家の減少を招いている。そこで、本研究では、作業効率の向上と人件費削減を目的として、自動で黒平豆の規格品と規格外品の選別ができる装置の開発を行う。

規格品のデータ、規格外品のデータ、何も写っていない状態のデータをもとに、写った黒平豆が規格品か規格外品かを判定し、その結果をもとに規格品であった場合、サーボモーターを右に傾け、規格外品であった場合、サーボモーターを左に傾けるようにして選別を行う。また、何も写っていないと判定された場合は、サーボモーターを振動し続けるようにし、このサイクルを繰り返すことにより、多数の豆を選別できるようにしている。また、この実験は、PCを扱える環境でないとできないため、農場ではなく、研究室で行った。

考察

結果から、全体的に規格外品による選別になってしまっている原因に関して、カメラが振動によって判別の際に残像が写ってしまい、異形であると判断されてしまう点、PCのカメラを使用しているため、画質があまり良くない点などが考えられる。学習データの不足が原因であることも考えられるが、この実験は、規格品、規格外品、選別を行わない状態の学習データをそれぞれ1000枚ずつ用意して行った結果であり、それぞれ500枚ずつ学習データを用意して、選別を行った場合の選別精度も規格外品による選別で、精度としても変わらなかったため、学習データの不足が原因とは考えづらい。

女子会 小口 研

これらのことから、自動で黒平豆の規格品と規格外品の選別ができる装置の開発に成功することができた。しかし、農家での使用を達成するためには、まだまだ精度を上げる必要がある。また、現地の農場は、PCを扱えるような場所ではないため、PCなしでの動作もできるようにしていかねばならない。



写真4 パネル展の様子

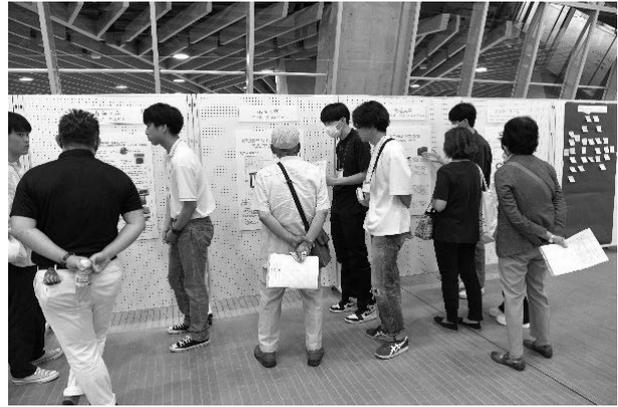


写真5 パネル展の様子



写真6 パネル展の様子

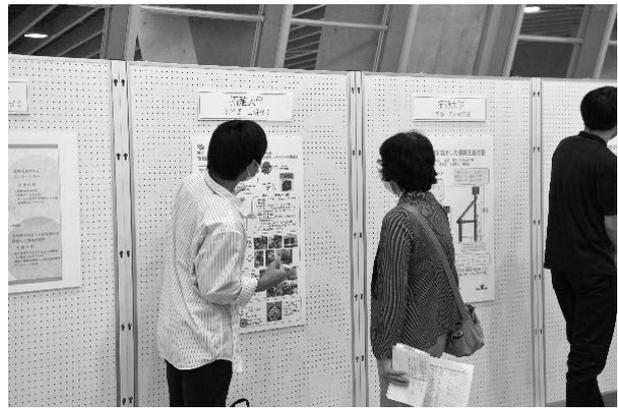


写真7 パネル展の様子

「文京区学生が創る盛岡アグリノベーション事業」の活動に関するパネル展を行った。それぞれの活動を1枚のパネルにて紹介し、シンポジウム開催前後の時間に学生たちが来場者に向けて自らの活動についての解説を行い、質疑応答、意見交換を行うことができた。

4. 盛岡さんさ踊り

盛岡市の魅力に触れるための企画として、盛岡市の郷土芸能であり盛岡、そして東北を代表する夏祭りでもある「盛岡さんさ踊り」をシンポジウム休憩中に会場の舞台上で上演した。演者は在京団体の「大江戸



写真8 盛岡さんさ踊りの様子



写真9 盛岡さんさ踊りの様子



写真10 盛岡さんさ踊りの様子



写真11 大江戸さんさのみなさん

さんさ」で、『七夕くずし』、『栄夜差踊り』、『福呼踊り』の3曲を披露していただいた。

盛岡市とその近郊には、古くは江戸時代から踊り継がれている伝統的なさんさ踊りを踊る団体が多数あり、それらの伝統的なさんさ踊りを市民にも親しみやすい形に変えて夏祭りとして運営されるようになったのが盛岡さんさ踊りである。第1回は1978年に開催され、今年で第46回目を迎えている。毎年8月1日から4日まで行われ、期間中は延べで3万人以上の参加者、そして延べ1万台以上の太鼓が出場することから、世界一の太鼓パレードとも呼ばれる、勇壮で華やかな祭りである。踊りも唄も非常に迫力があり、舞台に華を添えていただいただけでなく、そうした盛岡の夏の風物詩を感じる機会となった。

5. 学食イベント

盛岡市の魅力に触れるためのもう一つの企画として、本学の学食とも連携し、盛岡にちなんだ特別メニューの提供を行った。メニューは、本格盛岡冷麺、じゃじゃ麺、スイーツカフェセットである。そのほか、盛岡市や岩手県と関係ある物産の販売も行った。食事中も盛岡の魅力に触れていただくために、会場では、盛岡市プロモーション動画の上映や、岩手県のゆるキャラの展示なども行った。これらの盛岡特別メニューは大変好評で、用意していた100食も物販もすべて完売となった。



写真12 お出迎えする岩手県のゆるきゃら「わんこきょうだい」



写真13 学食の様子



写真14 学食で上映した盛岡市プロモーション動画



写真15 本格盛岡冷麺



写真16 学食の様子

6. おわりに

今回のシンポジウムでは、今年度3年目となるアグリイノベーション事業の到達点と今後の展望を検討することができた。本事業を初めて知った一般来場者の方や今年度から本事業に関わるようになった学生には、各関係者の思いや努力をもとにこうした域学連携が実現してきた経緯を知っていただく機会にもなった。それだけでも本シンポジウムを開催した意義はあったと思うが、上記のシンポジウム関連企画を通じて、来場者の方々にはまさに五感を通じて盛岡市の魅力に触れ楽しんでいただき、さらに盛岡市への関心を高めていただけたのではないだろうか。また、今回のシンポジウムを通じて事業関係者間の交流を深め、文京区と盛岡市のさらなる連携の一助となったなら幸いである。

シンポジウム参加者へのアンケートの結果

シンポジウム参加者へのアンケートを一部抜粋してご紹介します。

- ・素晴らしい学びの発表でもあり、ケーブルテレビのあらぶんちよで放映されたら良いと感じました。
- ・若い世代の方々が農家の方々と対面式で農業を学ぶことにより、苦労や喜びを共有することを肌で感じたと思います。また、代々受け継いできたその土地への愛情、先代の魂、伝統、風習その他を知ることにより、物事を深く考える力を養って欲しい。農業に真剣に携わっている人々やこれから農業を始める若者にこれからの日本の発展を託します。
- ・農業や中山間地域に関係するシンポジウムといったら農業系、社会学系の学科だけだと思っていたが、商業や工業など多方面からのアプローチを知ることが出来てよかった。
- ・シンポジウムのテーマと直接関係なくて申し訳ないのですが、参加していた1人の女子学生の、今まで知識を受け入れるばかりだったけれど、社会に向けて発信することができて楽しいという言葉が印象的でした。知識のinputも大切ですが、outputがそれ以上に大切なことを、あらためて考えさせられました。特に学生にとっては、小さな仲間内でのoutputではなく、その外に向けてのoutputは大切か思います。その意味で、そうした場を提供できるこうした取り組みは、良いと思います。壇上の学生たちの緊張した表情の向こうに見える生き活きとした表情の理由がそこにあるようにも感じました。「レシプロ感」？という言葉も出てきたかと思いますが、それにも通じると思います。
- ・最近の大学生は随分主体的に勉強していると感心した
- ・地元のかたや教員、学生の声の数多く聞けて、大変よかったです。さんざ躍りも見られて、とても充実していました。冷麺などは売り切れで残念でしたが、つゆやお饅頭などは買いました。
- ・現に学生が盛岡に行って活動しているのが分かった。もうちょっと具体的に何しているか分かったと良かった組もあった。学生時代は短いので、是非後輩が引継いで、継続してほしいです。
- ・基調講演では、社会課題の解決のために学生に参加してもらう意義について再確認することができました。また、全体を通して、盛岡市のもっている魅力と課題について、客観的に捉えることができました。
- ・発表するという経験を積む機会となり良かった。人前でディスカッションをするということが初めてで、緊張と不安があったが良い経験となった。
- ・学生さんが農業体験や知識を深めて活躍している事を知れて感心しました。こういう若い人がこれからも増えていって欲しいです。
- ・学生と農業従事者の繋がり、その経過・成果について発表されたことは、自分の中では、余り例がなく、新鮮でした。私自身、農業後継者であり、学生達の斬新なアイデアは、とても良かったです。また、シンポジウムでも、質問しましたが、学生達の農業体験が、今後生かされることを期待するものです。固定化した農業に対する考え方を、学生さんから、さらに学びたいと思います。今後とも、継続されることとなっており、今後の展開に、興味を持っております。
- ・地域活性化のために農業や畜産業に大学生が関わり最新の技術が導入されるのは興味深いです。
- ・盛岡と学生が交流をすることで、盛岡の発展につながり、それが第一次産業にとっても重要なことであると感じた。

跡見学園女子大学地域交流センターブックレット vol.4

地方を盛あげ隊！ ～文京区学生による盛岡アグリイノベーション～

発行日：2024年3月15日

編者：跡見学園女子大学地域交流センター

発行：跡見学園女子大学地域交流センター

〒112-0012 東京都文京区大塚1丁目5-2

電話：03-3941-7420

印刷：セントラル印刷(株)

地方を盛あげ隊！

2024年3月

～文京区学生による盛岡アグリイノベーション～

刊行によせて …………… 跡見学園女子大学地域交流センター

第1部 シンポジウム

「地方を盛あげ隊！ ～文京区学生による盛岡アグリイノベーション～」 講演録

開会あいさつ ……………	小仲信孝
来賓あいさつ ……………	成澤廣修
来賓あいさつ ……………	谷藤裕明
文京区と盛岡市の関係紹介 ……………	堀越厚志
盛岡市の魅力紹介 ……………	福田 一
基調講演 大学と地域によるアグリイノベーション —協同探究から実践コミュニティをつくる— ……………	早田 宰
アグリイノベーション事業を語る ……………	熊谷俊彦
パネルディスカッション —文京区の学生は盛岡で何を学び感じたのか— …………… 磯道 駿介、和田 乃英加、岡野 弥生、土屋 祐太、佐久間 優衣、早田 宰、熊谷 俊彦、川副 早央里	
閉会あいさつ ……………	土居洋平

第2部

シンポジウム関連資料

盛岡の魅力に触れ、交流を深める ～シンポジウム関連イベントの記録～ ……………	川副早央里
シンポジウム参加者へのアンケートの結果	